

宇宙人の憂鬱

1 卷



衛兵呑ハイ耐

宇宙人の憂鬱	3 2
宇宙人の憂鬱	3 3
本格侵攻 序章	
宇宙人の憂鬱	3 4
宇宙人の憂鬱	3 5
宇宙人の憂鬱	3 6
宇宙人の憂鬱	3 7
宇宙人の憂鬱	3 8
宇宙人の憂鬱	3 9
宇宙人の憂鬱	4 0
宇宙人の憂鬱	4 1
宇宙人の憂鬱	4 2
宇宙人の憂鬱	4 3
宇宙人の憂鬱	4 4
宇宙人の憂鬱	4 5
宇宙人の憂鬱	4 6
宇宙人の憂鬱	4 7
宇宙人の憂鬱	4 8
宇宙人の憂鬱	4 9
宇宙人の憂鬱	5 0 話わが家の真実
宇宙人の憂鬱	5 1 .
宇宙人の憂鬱	5 2 .
宇宙人の憂鬱	5 3 決意
宇宙人の憂鬱	5 4 . 決意 2
<あとがき>	

宇宙人の憂鬱

出逢い、覚醒編

宇宙人の憂鬱 1.

わたしは子供の頃から周りの人々に変わってるって言われ続けている。

どこが、どの辺が変わっているのか自分ではわからないから、人に尋ねてまわった事もある。

そういう所が変わっているんだよって言われたが、どういう所だよって、一向にわからなかった。

わたしはたいていの時間¹人で過ごしていた。

本を読んでいる事が多かったが、ボツとしてラジオやテレビに見入っている時もあった。

一緒に遊んでくれる友達も居たが、あまり多くは無かった。

虐められていた時もある。

女だてらに反発して、青あざをこしらえて帰ったこともあった。

何が人と違うのだろうって、いつも思っていた。

どうして自分が、どうして自分だけがって思って、でも家には財力もなくて、ぐれることも出来なかった。

ぐれて暴れ回るのは、中流以上の特権だって、いつも思っていた。

わたしを虐めていた同級生達も、皆、お店の子だったり、収入の多い家の子が多かった。

わたしが反発したら、わたしの身体が大きいものだから、⁵人がかりで押さえつけられて、反対に青あざを作る羽目になった。

自分の身体が大きいのは別に気にならなかった。

むしろ虐めてくる奴らに抵抗できる武器だと思っていた。

わたしはいつか奴らを殺してやろうと、ポケットにはカッターナイフを持ち歩き、空手の道場へ通い、身体を鍛えていた。

それが中学の卒業まで続いた。

高校に入ってから様相が一変した。

小学生と中学生時代がそんなだったから、勉強も遅れがちで、高校はとても進学校に進めるレベルではなく、遠くの、偏差値が少なめの学校に通うこととなった。

その事に対しても、別にどうという感情もなかった。

子供の頃からの虐めもあって、出来るだけ人と係わらないような仕事がないものかと

考えて、親にも姉妹にも相談したこともあった。

でも、どんなに探しても、人と係わらない仕事なんて無いって事に気が付いて、考えを改めた。

進学のと期になると、知識欲はあったが、進学に対して興味は無かったので、資格だけ取れば良いと、通信制の大学を選んだ。

大学でコネでも作れば良い会社に入るとか、そう言った考えも、まるで無かった。いつからか忘れてしまったが、独立起業するか、個人事業主にでもなるか、そんな道を探し始めていた。

だからわたしには大学の思い出というのは無い。

だけれども、高校時代は楽しい思い出がいくつかあった。

好きだと言ってくれる男子がいて、面と向かって告白されたこともある。

残念ながらわたしの心はまだ頑なだったので、その男の子には良い返事を返してやれなかったのが少し心残りとなった。

だが、今ならばその男の子に良い返事を返せたかというところ、それはまた別の話なのである。

わたしの一番良い時期だったのかも知れない。

高校を卒業して、それでも家にはわたしを飼っておけるだけの財力が無かったので、バイトをしながら中古のパソコンを買い、一番安い価格のインターネット回線をひいてもらって、ネットの通信教育で大学卒業の資格を得た。

卒業までの何年かは、バイトと学業の両立で大変だったが、バイト先では友達も出来たので、まあ、一応青春っぽい雰囲気を楽しんだ。

で、ここには通信制の大学を卒業できてからも、すぐに起業というわけにはいかずに、バイト先のアニメやゲームを手がける会社の事務をやっている23歳のわたしが居た。

宇宙人の憂鬱 2

「下山さん、ここ、数値が違うよ」

言われてから改めて確認すると、表計算ソフトの数値が1カ所だけ0が1つ多く入力されていた。

「済みませんでした」

わたしは急いで訂正すると、すぐに修正データを保存した。

わたしの名前は#下山 魚子--しもやま ななこ--#。

今年の3月で23歳になった、若輩者だ。

人は敬愛の念を込めて、わたしを”ななみん”と呼ばない。

呼ばないんかい〜と1人で心の中でツッコミを入れる。

わたしの勤務するドリーム WORKS という会社は、主にアニメの制作を請け負う会社だった。

オリジナル作品も手がけるし、他からのコマーシャル用のアニメなども制作していた。そうは言っても、会社の規模は小さく、PCを駆使しなければ、真面目なアニメ制作など出来ないのではと思うほどの零細企業に近かった。

だが、業界の中ではめずらしいらしく、障害者の雇用も積極的に行う会社である。ぶっちゃけ、安い労働力が欲しいからでは？という意見も聞かれたが、我が社の社長曰く、「誰にも等しく労働のチャンス！」と、理念を熱く語っていた。

わたしがこの会社に入ったのは、虐められていた時に見たアニメが印象的で、この業界に興味を持っていたから。

バイトを探していた時に、ハローワークで偶然見つけて、学歴不問の謳い文句を信じて、面接を受けてみたのが採用につながったわけだ。

かと言って、わたしは絵を描くのが得意というわけではなく、パソコンは人並みに使えたので、事務職に入れてもらった。

と言っても、最初はアルバイトだったが。

別段大きな野望があったわけでは無いが、こういう会社に入ったのだから、制作にもかかわれたらなという小さな野望もモテるようになっていた。

学生時代は生きる屍のような毎日だったが、この会社に入って、目標というものがたてられるようになってくると、人生にも張りが出てきて、交友関係も少しだけ広がった。

何よりも、もう少し生きてみようかなと言う気にも成れたのが、大きな変化だった。通信教育で勉強している時もそれなりに楽しいバイト先の思い出があるが、先の見えない不安から、気が変になりそうだった。

いつも死ぬことを、頭の隅に置いておいた気がする。

気がするというのは、今はもうその気が無くなってしまって、当時の思いなどは、心の奥に引っ込んで、忘れているからと言う事もある。

わたしは机の上に置かれた、紫色の綺麗なスマホを手にした。

時計を見るためだが、隠れるようにメッセージを確認してみる。

まあ、メッセージは来てないんだけどね。

時計はあと少しでお昼の休憩だと告げていた。

わたしは軽くストレッチをすると、気合いを入れて、パソコンに向き直った。

外注先に渡すお金の計算。

面倒だが、大事な仕事。

それが済むと、別の仕事。

面倒でたまらんけれど、この会社、小さいものだから、事務員はわたしの他に1人だけ。

彼女は今日は、子供に付き添って、病院で受診。

おばあちゃんが倒れてからは、旦那さんと交代でお子さんを看ているのだとか。

わたしも早く子供が欲しいなどと言っても、まだ相手も居ないのだ。
白馬に乗った王子様なんて期待していませんが、まだ人を好きになれるような心の余裕が出来ていないのだなど、自分なりに納得する。

なんて悲しい人生！

って、思っていないところが、さらに病んでいるのだなど、自覚してしまう。
そうこうしているうちに休憩時間になり、5人しか居ない小部屋が、わたし1人になってしまった。

わたしはこの時のために用意してきたお弁当を、足の下のクーラーバッグから取り出すと、これよこれ！唯一の楽しみ！と、いただきますをして食べ始める。

宇宙人の憂鬱 3

誰も居なくなった事務部屋で、1人手製のサンドイッチを食べるわたし。

しかも材料は、たまごとハムとバター以外はすべてお手製。

パンも自分で焼いた。

野菜はプランターで栽培して、マヨネーズも自家製。

誰にも食べさせたことはない。

どうしても、自分から友達を作る事が苦手なものだから、この年で、彼氏なんて出来るわけもなく、1人で手弁当。

なんだか寂しい。

だけど、緊張感から開放される瞬間でもある。

そんなことを考えながら食事をすすめていると、突然ドアが開いて、空いた入り口から、小さな女の子が入ってきた。

誰かの子供かな？

わたしは姿をよく確認しようと、箸を止めて身を乗り出して、少女を探す。

机の影から、まるで物陰に隠れるようにしゃがんで、少女もこちらを見上げていた。

わたしは下手くそな作り笑顔を引きつらせながら、少女と目を合わせた。

少女は怖いのかな？こちらをじっと睨んでいる。

心なしか、顔色も青白い。

血色が悪く、栄養の行き届いていない、そんな様子だった。

わたしは下手くそな笑顔をそのままに、少女に語りかける。

「お母さんを待っているの？」

少女はそれでも答えない。

わたしの笑顔がいけなかったのだろうか。

生まれてこのかた、ちゃんとした笑顔なんて作った記憶もない。

もっとも、普通の人なら、笑顔なんて記憶するほどでもないのだろうが、笑顔がキモイとか言われてきた人間にとっては一世一代の笑顔のつもりだった。

だが、それも、この少女相手には無力だった。

少女はじっとわたしを見つめていた、というか、睨んでいたが、しばらくすると首を横に降った。

それは否定の意味だろうか？

「じゃ、どうしてここに？」

わたしの間に、居てはいけないのかという様子で、また無言でじっと見つめてくる。わたしはどうしたら良いかわからずに、途方に暮れていると、少女はわたしに手を差し出してきた。

わたしはほとんど自然に、何のためらいもなく、少女の手を取り、握りしめていた。生気のない手だなと思ったが、握ってみると、それ以上にしっかりと冷たい感触が伝わってきた。

それにしてもいやに青白い手だなというのが、見た目の印象でもある。

わたしは再び少女に顔に視線を向ける。

少女もぎこちない笑顔でわたしに向かって微笑みかけていた。

その瞬間、すべてが理解できた気がした。

この子、虐められていたんだ。

少女に歪な笑顔には、過去の自分が重なって見えた。

そしてもっと驚愕の事実気がついてしまった。

この感触、暫く忘れていた。

虐めが酷くて、精神状態が一番最低だった中学時代に何回かあった感覚。

見た記憶。

その時代、連日この世のものとの思えない幽霊のようなものや、化物の声などが聞こえるようになり、精神科で薬をもらっていた時期がある。

その後、高校に行ってからはいったものを見なくなってしまい、精神科にか通わなくなったのだが、少女には、その時に見たモンスターや幽霊などと同じ感覚があった。

その事に気がついて、わたしの心に恐怖心が湧いたのを見ていたのか、少女が初めて口を開いた。

「わたしはあなたの味方よ」

口は動いたようには見えなかったが、耳にはそう聞こえてきた。

味方とは、どういうことなのだろう。

少女はまた、わたしの思考を察してか、言葉が伝わってきた。

「あなたを守ってあげる」

なんのことかわからずに居ると、彼女は更に続けた。

「あなたはこれから不思議な者たちと関わるようになる。その時に、何かあったらわたしが守ってあげる」

少女はそれだけ言うと、にっこり笑って、わたしの目の前からスーッと消えていった。

不思議なことに、恐怖心は一切なかった。

少女の最後の笑顔からは、不吉なものではなく、暖かな波動が感じられたのだ。

しばらくすると、廊下で人の声が聞こえた。

わたしは我に返って、お手製サンドイッチを食べて、りんごジュースの入った水筒を口にした。

一体なんだったのだろうか？

深く考える前に、同僚が²人帰ってきてしまった。

まだ休憩時間は半分も凝っている。

この人たちは昼抜きの間かな。ダイエットは程々に。

わたしは意地悪く心の中で毒づいた。

宇宙人の憂鬱 4

休憩時間早めのお戻りは、#匡子--きょうこ--#さんだった。

#長屋 匡子--ながや きょうこ--#、わたしよりも3年先輩の既婚者。

先ほどの少女と同じくらいの年の子供が1人いるはず。

彼女は途中入社で、わたしよりも6歳年上の29歳。

更に、学生時代のできちゃった結婚だって言っていたから、子供は7歳くらいらしい。

わたしには、縁のない世界だ。

「たまには私たちと休憩しない？」

わたしに気さくに話し掛けてくれるのは、匡子さんだけ、ではないが、匡子さんが一番多い。

「ありがとうございます。今度お願いいたします」

堅苦しい返事に、匡子さんは、わたしの背中をポンポンと叩いて、

「堅い！堅いよ。魚子ちゃん」

と言った。

「堅い、ですか」

「ですかじゃねえよ。魚子、オレの女なら、もっところ、軽い乗りで！」

匡子さんは言いながらわたしの右となりの自分の席に座った。

「オレの女ですか」

わたしはまた、ぎこちない笑顔で答える。

「そうだよ、オメエはオレの大事な女なんだぜ〜」

そう言いながら、匡子さんはわたしの肩に手を回してきた。

いやらしさはなく、ガツと腕を回されたので、なんとなくいい気持ちになった。

「アンタはなんかこう、楽しめてない気がするね」

匡子は腕を離し、わたしの体から離れて、じっとわたしを見つめる。

「人生楽しまないと損だよ」

休憩時間はあと僅か、早めに仕事を始めた。

廊下で人の動く気配がしたかと思うと、残りの人数が、休憩から戻ってきた。
わたしもサンドイッチの残りを、水筒のりんごジュースで流し込むと、まだ半分残った水筒を保冷バッグにしまい、サンドイッチを包んでいたラップを、右隣のゴミ箱に入れた。

仕事が始まり、時間が流れて退社時刻になった。

その間、何もなかったわけではないが、まあ普通の勤務時間中の出来事だった。

わたしはいつもよりも早めに会社を出た。

今日はなんだか、早めに帰宅したかった。

わたしは、冷蔵庫の中身が少なくなっていることに気がついて、帰りがけに近くのスーパーへ寄り道をしなければならなかった。

冷蔵庫の中身が充実した代わりに、財布の中身が心細くなったことに、生活の大変さを実感した。

わたしの給料は決して高いものではない。

だから買い物と言っても、定番の野菜しか買わなかったし、肉と卵をほんの少し買っただけだった。

調味料はまだある。

わたしは就職が決まった時に一人で生活してみたくなくて、今の部屋を借りたのだ。実家はそんなに遠いところではなく、ほんの7駅ほどの距離であるから、何かあるごとに、まだ健在の両親が尋ねてきたり、自身で実家に帰ったりもしていた。

仕事場も、アパートから歩いて3キロ程度の距離であった。

わたしは3キロの距離を、いつも歩いて通っていた。

スーパーは中間点にある。

わたしがスーパーから出てきたところで、昼間あった女の子の姿が見えた。

女の子を見ても、不思議と怖いとか恐ろしいとかいう感情が浮かばなかった。

女の子はわたしを見て、ニッコリと笑った。

ぎこちない笑顔だが、楽しそうにさえ思えた。

この子、幽霊さんなんだよね。

わたしは自分に問い直す。

そんなわたしの思考が読めるのかどうか分からないが、女の子が言葉を送ってくる。

「あなたの言うところでは、幽霊ね」

にっこり微笑んで、頷く。

「やっぱりそうだったんだね」

わたしは少女に言った。

でもなぜ？

その答えはまだ得ることが出来なかった。

「わたしの名前はルクスと言うの」

自分のことを幽霊だという女の子が、名前を覚えてくれた。

わたしも自分の名を教えた。

「わたしは下山魚子よ」

「ななこはどう書くの？」

「さかなの、子と書くのよ」

わたしが言うと、少女は楽しげに飛び跳ねた。

面白い名前だと思ったのだろう。

わたしは、そんなに笑わないでよと、少女を睨んで見せる。

少女はさらに笑い転げた。

明るい幽霊さん。

わたしは、彼女に、行きましようと言って歩き始めた。

宇宙人の憂鬱 5

スーパーから、残り1.6キロほどの道程は、ルクスと一緒にだったので、退屈することはなかった。

ルクスは見たい目よりもずっとおしゃべりで、きっと根っこの方では明るい性格だったのだろう。

けどこの子からは同じ同類のような感覚があった。

わたしは思いきって、彼女に聞いてみることにした。

「ねえ、あなた、生きていた時はどんなだったの」

わたしの問いに、彼女は青白い顔をこちらに向けて、目をパチクリさせて、頭を少しかしげた。

よく憶えてないのかな？

「わたしね、よく虐められていたみたいなんだよ」

「みたい？」

「虐められていて、殺されちゃったの」

ルクスの衝撃の告白に、わたしは何と答えたら良いのだろう。

殺されていたのか。

わたし以上に辛かったのだ。

待てよ、このくらいの子供が殺人に遭うという事は、殺したのは大人だよな？

親に殺された、とか？

あり得る。

「わたし、両親に首を絞められて、殺されたらしいの」

らしいって・・・。

「なんかよく憶えてないの。でもそうなんだよね」

さらに続けて、「お前なんて要らないって」

わたしは本当になんて答えたら良いのかわからずに、呆然としてしまった。

「わたし、要らない子なの？」

わたしはこの幽霊が愛おしくなって、抱き上げようとしたが、身体がすり抜けてしまい、無理だと気が付いた。

「あなたは要らない子じゃないよ」

「本当にそう思う？ありがとう」

ルクスは本当に嬉しそうにわたしを見て笑った。

その後の話は、本当にとりとめのない話だった。

だけれど、どうして彼女がわたしの所へ出てくる事になったのかは、一向に話してはもらえなかった。

誰が想像する？

幽霊とこんなに会話が出来るなんて。

わたしに靈感があったのかな？

「さ~どうかな」

ルクスが意地悪を言う。

「ルクスは意地が悪いのね」

わたしが言うと、またルクスは笑った。

「よく笑う幽霊さんだね」

それを聞いて、ルクスはさらに転げまわった。

ルクスと話していると、あっという間に自分のアパートの前に来てしまった。

「上がってく？」と、普通に友達にでも話をする調子で、ルクスを誘ってみる。

ルクスはまた笑った。

「わたし、幽霊だよ」

「だから何？幽霊だって人様のうちに上がる時は、住んでいる人に断ってから上がるものです」

わたしが真面目な口調で言うと、またルクスは笑い転げた。

「わかった。あなたの部屋にお邪魔させていただきます」

ルクスはペコリと頭を下げると、また微笑んだ。

青白い顔で、にっこりと微笑まれても、彼女の微笑みは怖しげだったり、気味悪かったりという印象は受けなかった。

わたしはルクスに、どうぞ、と、スカートの裾をつまむ振りをして、ちょっと膝を曲げて、右手で入り口に誘った（いざなった）。

そして、目を合わせて二人で笑い合った。

部屋に入ると、かたちだけでもと思い、冷蔵庫からリンゴのジュースを取り出して、コップに注いで、ルクスに出した。

ルクスはテーブルの上のコップを眺めていたが、コップが触れないので、畳に座って

少し哀しそう。

悪い事を下かなと少し反省。

わたしの部屋は狭い台所というカリビングもどきと、奥の方が畳の六畳まである。奥の六畳間に低いテーブルが置いてあり、ゲーミング用のノートパソコンが1台置いてある。

そのとなりに、リンゴジュースのコップを置いてあげたのだが、ルクスには不評だったか。

さらに部屋の奥の窓際には、テレビ台のない小型のテレビと本が数冊置いてあるだけだった。

わたしは、今朝多めに作って冷蔵庫にしまっておいたサンドイッチをとってくると、それを夕食にした。

宇宙人の憂鬱 6

わたしが軽い夕食をすませると、ルクスはまだうちに居て、ジュースの入ったコップをつかもうと必死になっていた。

わたしはなんだか自分が母親になった気がして、ルクスが自分の娘の様な気になって、彼女の行動を眺めていた。

時々、母性のようなものを感じることはあっても、ルクスを見ていると、異常なほどに愛おしく思えてくるのは何故だろう。

彼女が親にも虐め殺されたという話を聞いたからか？

それだけではない気がして、その正体を知りたくて、わたしはルクスを眺めていた。可愛い！

こんな子供なら欲しいと、本気で思えてきた。

まだ、結婚すらしていないのに、子供だけ欲しいなんて。

わたしが見詰めているのに気が付いて、ルクスはどうしたの？と、視線で尋ねてくる。その表情に、さらにキュンと胸を射抜かれる。

「ありがとうね、そう思ってくれて、ありがとう」

ルクスは今にも泣き出しそうな声で、わたしの思考を読み、そう言った。

「いつでも出てきて良いのよ、暇な時にはお話ししましょう」

わたしが言うと、ルクスは「ありがとう」と言って、笑って見せた。

やはりどこか悲しげな笑顔だった。

「仕事の時は、邪魔はしないね」

「うん、お願い」

言うてから、わたしはルクスに向かって、「雰囲気だけでも、お菓子でも食べる？」と誘ってみた。

ルクスは嬉しそうに目を輝かせて、期待の眼差しをわたしに向けてきた。

「お菓子、お菓子」

ルクスは歌いながら、わたしが台所の棚から、甘いクッキーを持って来るのを待った。安い袋菓子だが、ルクスはこんなの食べたことないよと、涎を垂らしそうな表情を浮かべた。

「やっぱり雰囲気だけってのは辛い」

ルクスはそう言うと、わたしにお願いがあると言って、こちらに向き直って、正座した。

「わたしに身体を、少しだけ貸してくれない？」

真剣な眼差しで頼んでくるものだから、幽霊に身体を貸しても大丈夫なのかと躊躇したが、貸してやることに決めた。

だけど一応目的は聞いておく。

「お菓子の味を確かめたいの」

ルクスは笑ってそう言った。

ルクスがわたしの身体を乗っ取る気なら、とっくにやっている。

幽霊だからね、わたしが気付かないうちにやれてしまう。

わたしは彼女を信じることにした。

「ありがとう」

「さあどうぞ」

わたしは腕を広げて、彼女を迎え入れる格好をした。

彼女はクスリと笑うと。スーッとわたしの身体に侵入してきた。

冷たい感覚が、身体を支配して行く。

そしてほんの少しだけ、身体が重くなり、頭がボウツとした。

その瞬間、わたしの身体からエネルギーが迸るような感覚を覚えた。

手の先から、痺れるような感覚があったので、視線を向ける。

皮膚から光が漏れているように見えた。

身体からはエネルギーが湧き上がってくる。

活力が漲ってきた。

ルクスがお菓子を取ろうと手を伸ばした。

そうすると、クッキーの方から勝手に、伸ばした手に吸い付いてきた。

クッキーが浮いたのである。

テレキネシス、そんな言葉が、わたしの脳裏に浮かんだ。

ルクスはわたしの身体を使ってクッキーを7個ほど味わってから、わたしの身体から離れた。

満足そうに笑顔を浮かべる。

目的はお菓子だけでは無かったのかも知れない。

ルクスはわたしを守ると言った。

わたしの身体に入ったのは、この力を確認したかったのかも知れない。
わたしはこれからいったいどんな事件に巻き込まれていくというのか。
可愛いルクスとの冒険の日々に期待するほどわたしもバカではない。
少し怖ろしくなって、身震いした。
ルクスは何事もない様子で、テーブルのお菓子を取る仕草をしたり、楽しそうに笑っていた。

宇宙人の憂鬱 7

「ルクス、あなたって、何人？どこ出身？」
至極当然と言うか、自然な疑問だと思う。
ルクスの見た目は本当に純粋な日本人という感じだ。
でも、ルクスと言うには、かなり変わった名前。
キラキラネームが流行ったときもあったが、その時の名残か？
本当に興味が出てきた。
ルクスは一体何人なのか。
どこ出身なのか。
当のルクスは鼻歌を歌いながら、なにか面白いものはないかと、辺りを見回したり、忙しく動き回っている。
「ねえ、ルクスちゃんって、どこの生まれなの？」
本当に単刀直入に、単純な好奇心で聞いてみた。
ルクスは鼻歌をやめて、わたしを見詰めて笑いかける。
「そんなこと聞いてどうすんの？」
天真爛漫な声に、わたしの心は揺らいだけれども、それでも知りたい気持ちが凌駕した。
「いいじゃない。あなたのことが知りたいのよ」
わたしの言葉に、ルクスは少し表情をくもらせて、間を置いてから答えた。
「ありきたりな答えで良い？」
わたしはどう言う意味なのかわからずに、首をかしげた。
ありきたりな答えって、なに。
ルクスは迷っているようだった。
何に迷っているのかはわからなかったが、ルクスは答えるべきか迷っていた。
わたしは、聞いてはならない事を聞いたのかなと、少しだけ心配になった。
ルクスは意を決した様子で、わたしをハタと見た。
「実は、あまりよく覚えていないの。でも、両親は、外国で出会って、わたしを産んでから、この国に来たらしいの」
本当に、ありきたりな答えかも知れない。

要するに、わからないって事だ。

ただ、ルクスの表情を見る限り、本当に嘘を言っている分けでは無いようである。

ルクスは暗い面持ちで、焦点の合わないどこかを眺めていた。

わたしは、ルクスに向かって、なんて声をかけたら良いのか考えてから、凡庸な声かけをした。

「覚えていないのか。追々思い出せば良いよ」

こんな答えに、彼女は暗く微笑むと、さらに落ち込んだ表情をした。

わたしは話題を変えた。

本当はこちらの方を優先するべきだったが、順番を間違えたのは仕方がない。

魚子は答えをほんの少し提示してやれば良かった。

「覚えていないんじゃ、仕方ないですね」

「では、ルクスは何のためにわたしのところへ？何かと戦ったりとか」

ルクスはやはり何も答えなかったが、わたしの考えが、あながち間違っていないことを、実感できた。

魚子はお酒をゆっくりと、嗜んだ。

その仕草に、ルクスは狡い！という感覚で、わたしに睨みをきかせてきた。

わたしは、自分の人生にも疲れ果てていた。

ルクスにも関心はあったが、あまりしつこく聞かない方が良いのではないかと思い、

ルクスにも、甘い言葉をかけてやった。

「話したくなかったら、無理にとは言わないけれどね」

とわたしは言った。

宇宙人の憂鬱 8

ルクスはおもむくおぼろしくしながら、テーブルの上を指で突いたり、中指の腹で擦ったりして、多分だか、気持ちをごまかしていた。

「ルクス、わたし、悪い事言った？」

ルクスは黙ってうつむいた。

「あまり答えたくないな。実は、大変だったんだよ」

わたしは黙ってルクスを見詰めた。

ルクスは意を決したように、わたしを見詰めながら、生い立ちを語りはじめた。

ルクスは大きく溜息をつきながら、自分が孤児であることや、自分お名前が、実はあやふやであるということなどを、切々と語った。

どう言う事かという、ルクスのなくなったのは30年も昔なんだとか。

わたしの生まれる前なんだから、そりゃー記憶も曖昧に成って思って、少し、ルクスに同情した。

ルクスはわたしなんかよりも壮絶な人生を歩んできているようである。

その事が、なんだか不憫でならなかった。

上から視線なんじゃないかって言われそうだけれども、同情とかそういったものではなく、本当に悲しく思えて仕方がなかった。

わたしはまた、ルクスを抱きしめたい衝動に駆られたが、ルクスは幽霊なので、抱きしめることはかなわなかった。

わたしはルクスに対して、それ以上身の上を聞くのをやめにした。

本人が語りたくなったら、きっと語ってくれるだろう。

代わりにわたしは自分の身の上を語った。

小学校時代や、中学校時代に酷い虐めに遭ったこと。

高校時代にはなんとか人間らしい思考を取り戻せたことを語って聞かせた。

ルクスはそれをどう思っていたのか、わたしは聞きたかったが、彼女は何の反応もなかった。

なんの反応もなかったというのは少し違うか。

うつむいて、「大変だったね」とだけ言った。

わたしとルクスは、同じような人生を歩んできたが、ルクスの方が華なり酷い人生だった。

わたしはルクスの人生に、同情の気持ちなど無かったが、涙を禁じ得なかった。

ルクスはと言うと、やはりわたしの虐めの記憶に、思うところがあったらしい。

わたしを見詰めながら、「辛かったね」などと言ってくれた。

ルクスの目には、涙など無かったが、二人の心は確かに泣いていた。

もっと良い人生があったのでは無いかと、ルクスは死んでからも思ったし、わたしは現在を生きながらも、そんなことを考えながら日々を過ごしていた。

生きている者と、すでに死んでしまった者との違いはあったが、二人の共感、その違いを乗り越えて、通じあっていた。

わたしの心は今までの経験上、これ以上通じあうのは危険だと告げていた。

今までは、親友だと思われるものにも裏切られ続けてきた。

だから、ルクスにも警告を発する反面、信じてみたい、いや、信じるに足るというもう一つの心情も、ルクスに対して抱いていた。

どちらの心が正しいのか、わたしには判断できない所があったが、ルクスに対して信じていたい、コイツは仲間だという気持ちも大きかった。

ルクスを眺めていると、こんな天真爛漫な、いたいけない子供が、どうしてわたしよりも凄惨な虐待を受けていたのか、そういったことを考えると、思考回路が変な具合に物事を考えてしまう気がしてならなかった。

わたしは大きく溜息をついた。

宇宙人の憂鬱 9

ルクスは、一つだけ思い出した事があると言った。

わたしは、それは何？と尋ねたが、ルクスは答えをくれるのに、少し間を置いた。

戸惑っていると言うよりも、言葉を選んでいるという様子で、考え込んでから口を開いた。

「わたし、凄いぶたれて、泣き叫んで、それでもあの人達は助けてくれなかったんだよね。だから本当は思い出したくも無いのだけれど、どうやらわたしの親って、本当の親じゃ無かったみたい」

ルクスはさらにわたしを驚かせる言葉を並べていった。

「わたしの本当の両親は、夜逃げをしてしまったらしいの。どうやら借金を苦に、心中したらしいって言っていた」

「ルクスというのは、実は、わたしが勝手に名乗っているの」

「本当の名前はあるのだけれど、わたしを殺したあの人達がつけた名前なので、名乗りたくないの」

ルクスは言葉を句切りながら、一気に話してくれた。

わたしは言葉をかけるのはばかられるくらい、ルクスに同情していた。

両目の端から、涙がスッと頬を伝うのがわかった。

テーブルのティッシュを取り出して、目の端を押さえつつ、何か彼女に言葉をかけるべきか迷った。

「どうしたの？」

ルクスがわたしの様子に気がついて、彼女もなんだか泣き出しそうな顔を向けた。

幽霊になっても、昔の辛い思いでは消えないんだな、わたしはルクスを見て、また涙した。

辛い思い出を思い出させてしまった。

わたしはルクスの傷をえぐってしまった。

自分の名前すらも思い出した無ないほどに、辛い思い出なのに、無神経に聞き出してしまったのではないかと、かなりココロが痛んだ。

その上で、わたしは今初めて、あることに気がついた。

ルクスは透明ではない！

そればかりか、青白くもない！

まあ、顔色が悪く見えるということでは、青白い顔をして見えるが、ホラー映画のそれとは、全然違う。

透明ではないというのは、今は透けて見えないということだ。

初めて会ったときは、透けて見えていたが、今は全然透けて見えない。

どうしてそうなのだろう？。

わたしがなれてきたからなのだろうか。

ルクスはわたしの思考が、ある程度読めるらしいので、わたしの顔を覗き込みながら、首を傾げた。

その仕草が、わたしのオタク心をくすぐった。

可愛い！

わたしにも母性が有ったのかと、再確認できる瞬間だった。

「わたしは大丈夫だよ」

ルクスが言った。

わたしのことを慮って言ったことだろう。

幽霊にもこんな心情が有ったなんて思わなかった。

「そう？」

わたしは言った。

今度はわたしのことを話そうかなと思ったが、今じゃない気がした。

そしてもう一つ、ハッキリとさせておかなければならないことがあったのを、思い出した。

あの力。

ルクスがわたしに入った時に発揮できたあの力の意味は。

ルクスはなにか知っているようだが、黙っているのは、ひょっとして、アメコミ映画のヒーローみたいに、力を悪用しようとする組織との戦闘とかあるのかな？と、まるで子供のような、顔を赤らめたくくなるような想像を巡らせてみたのだが、ルクスは何も言ってはくれなかった。

わたしは少々がっかりした。

わたしにも、ドラマの主人公のような展開が来たかと思ったのだが、ちょっと違っていたようだ。

まあ、幽霊と話している事自体が、普通の人々と違うのだから。

宇宙人の憂鬱 10

ドラマ的な展開、物語の主人公のような展開、そんなこともう期待しません。

そんな展開を期待していたら、まさか本当に、期待通りの出来事が起ころうとは思わなかった。

そして、物語の中の出来事は、作り話が安全なんだと、主人公達が作者のフィクションの中にいるから、心躍る冒険を楽しむ事が出来るのだと、実感出来るほどの事件に発展していこうとは、この時のわたしは思わなかったのである。

ルクスと話していると、突然照明が瞬きはじめた。

この部屋の照明は、蛍光灯から、LED ライトに変えてあった。

蛍光灯と違って、LED ライトが通常時に点滅する事は、まず無い、と、わたしは認識している。

そして今、LED ライトが点滅している。

装置の故障か、とも思ったが、今までこんな事は無かった。

なんだろう？

そう思った時に、ルクスが反応した。

「とうとう来た」

何が来た？

わたしはルクスに質問しようとしたのだが、ルクスはその前に、わたしの身体の中へスッと入り込んできた。

先ほど以上にエネルギーというか、活力が漲る。

－何が来たの？－

わたしは声にはせずに、ルクスに聞いてみる。

大丈夫だよな？聞こえているよね？

－大丈夫だよ、聞こえているよ－

と、ルクスは答えた。

－何が始まるの？－

わたし。

－ヤツらが来たのよ－

ルクスは悲痛な声を、わたしの頭の中で響かせた。

－ヤツら？－

－いったいなに？－

わたしは何が始まるのかわからなかったが、この時は、物語の主人公的展開キター！などと、少しだけ暢気に期待していたのかも知れない。

－霊界のヤツらが、あなたを狙ってきたのよ－

ルクスは、わけのわからない事を言い始めた。

霊界？

死後の世界？

わたしを狙ってきたの？

なぜ？

疑問符がわたしの頭の中を埋め尽くした。

ルクスはそれには答えずに、何かが来るのに備えて、身構えている。

何が来るの？

何をそんなに怖がっているの？

新たな疑問符が、さらにわたしの頭の中の間隙を埋める。

わたしは何が何だか理解できなかった。

ルクスもまだ説明してはくれなかった。

きっと、この事態がなんとかなったら、説明してくれる・・・よね？

もう一つ浮かんだ疑問符に、ルクスはやっと返事をくれた。

－なんとかなったらね－

その言葉に、わたしは少しガッカリした。

余裕の無い返事だ、と思ったからだ。

ーと、思ったけれど、もう少し時間がありそうなので、答えてあげるわー
ルクスは子供の表情では無く、大人びた波動を、思念に乗せて、わたしの身体に漲らせる。

どう言う事かというと、臨戦態勢に入ったのだと、わたしは感じた。

戦闘態勢を整えながら、ルクスは事態の説明をし始めた。

宇宙人の憂鬱 11

ー最近、スーパームーンがあったでしょ？ー

ルクスの思考が流れ込んでくる。

スーパームーン。月が地球に最接近して、地上から見た月が、ほんの少しだけ大きく見える現象。

ーこの間のスーパームーンの時に、地獄の門が開いたのよー

ー地獄の門って、本当にあるの？ー

ヘルズゲート。

ホラー映画などでよく出てくる単語で、ゲームなどにも見られる単語である。

ーそう、あるのよ。わたしもそこを通過して帰ってきたのよー

ルクスはさらりと怖いことを言う。

ルクスも地獄の住人なのかな。

ルクスは続けた。

ーヘルズゲートを通過して、地獄の王が復活するのよ。そのために、取り敢えずこの町を乗っ取るための軍団が攻めてくるのよー

この町って、なんだか小さな話。

わたしは少しホッとしたが、話を最後まで聞いた時に、その考えは吹き飛んだ。

ーこの町の住人を生け贄にして、地獄の王を復活させるの。王が復活したら、軍団をもっと呼び寄せて、侵略の開始よー

そう来たか！

わたしは地獄の軍勢の目的がわかったことで、何となく安心してしまった。

ヒーロー小説のパターン。

わたし達が勝つパターンよね。

楽観的に考えないと、怖ろしくなって、逃げ出したくなってしまった。

もっとも、ルクスの言う事が全て嘘で、何も怒らないという事も考えられる。

ルクスが嘘を言っていないという保証は、どこにも無い。

ーわたしは嘘は言っていないよー

ルクスはいつ来てもおかしくない地獄の先兵に備えながら、緊張した思念を送ってきた。

わたしの中で、ルクスがもの凄く緊張しているのがわかった。

わたしは、ルクスのために、深呼吸をしてあげた。

同じ身体を使っているのだ、リラックスできるかも知れない。

ルクスは、—ありがとう—と呟いた。

—まだ時間がかかるの？—

ルクスの緊張が解けていないのがわかったので、彼女に尋ねてみた。

—まだ来ないよ。でもそんなに時間は無いはず—

ルクスはかなり固くなっている。

そんなに強い相手なのかな。

まあ、見た目では、ルクスはただの女の子。

子供である。

悪の軍団などと腕力勝負出来るような力はなく、負けるのは決まっているようなものだ。

わたしはルクスに聞いてみた。

—そんなに強い？ そいつらは—

ルクスはまた黙りこくっていたが、重い思考を發した。

—強いらしいわ。デミ戦ったことはないの—

そうだろうな。

こんなたいいけな少女が、暴力で勝てるわけがない。

わたしはそう思ってしまった。

だが、ルクスはもう少し楽観的だった。

—わたしは負けるつもりはない—

—勝算はあるによ—

—でも、実際にはまだ使ったことがないの—

ルクスは一気に言っただけだ。

—わたしには必殺技があるのよ—

ルクスが何を狙っているのかはわからなかったが、必殺技の存在に、ほんの少し疑問があった。

本当に勝てるのだろうか？

ルクスは、必殺技に自信が無いのかも知れない。

怯えているというか、恐れを抱いている気がしてならない。

乗り移られた状態だから、彼女の感情や思考が、手に取るようにわかった。

そんなことを考えていたら、わたしの左前方、部屋の片隅に、黒い光が迸った。

轟音が響いて、空間が、1メートルほど縦に裂けた。

そして、その裂け目から何者かの手のように見える、指のように見える物が伸びてきて、避けた空間の両端をつかんだ。

そして、何かが這い出してこようとしていた。

宇宙人の憂鬱 12

空間の裂け目が両脇に広げられて、白と黒の斑の頭が、ヌッと突き出てきた。
斑の間から、3つばかり正三角形に並んだ睨みがひらくと、赤く血走った眼球の瞳でわたし達の方を見つめる。

わたしは恐怖と言うよりも、戦慄をおぼえて、背筋に冷気が走った。

—これ、なに？—

ルクスに問う。

ルクスは緊張しているらしいことが、わたしにも伝わってきた。

—これは死獣という不死の化け物—

ルクスの態度が先ほどとは一変して、余裕の欠片もないと言った様子だった。

—不死？なの？—

死なない化け物をどうやって倒せば良いのだろう。

ルクスの様子だと、策もないようだけれど、わたしにだって思いつかない。

ルクスはゆっくりと、わたしの目を使って、相手を観察した。

そして、あることに気が付いたようだった。

—何か思いついたの？—

わたしは一縷の望みを託して、ルクスに聞いてみた。

—まだヤツは、完全にこっちの世界には出てこれないみたい。倒すならば今がチャンスかも—

??? 不死の相手をどうやって倒すのか ???

—相手を押し返すのよ—

ルクスが教えてくれた。

—さっき使った力があるでしょう？—

—ええ—

—アレは物体だけじゃなく、霊体にも効くのよ—

わたしはルクスが何を言っているのかまだよく理解できていない。

だが、押し戻せるのか……。

—今回はわたしがお手本を見せてあげるから、次からは魚子がやってね—

—ちょっと！力の使い方なんてわからないわ！—

わたしが言うよりも早く、ルクスが先ほどの念動力？のようなものを使い始めた。

全身に力が漲ってきた。

ルクスの操作が上手いのか、わたしの身体にエネルギーが有り余っているのか？

後者はないなと思いつつも、ルクスに身を任せて、全身のエネルギーの流れを感じてみる。

何故そうした方が良いのかわからないが、直感的にそうやった方が良いことが感じら

れたので、試してみた。

—上手い上手い—

ルクスが褒めてくれた。

これで良かったのだと、一安心だったが、でも、感覚をおぼえておくのは大変そうだった。

それに、準えて（なぞらえて）実行できるかどうかと言う問題もあった。

この化け物がかなり凄いというのは、感覚的にも理解できた。

でも、これがただの先兵だというのならば、後続はもっと強力な化け物が攻めてくるという事になる。

わたしがそんな事を考えていると、ルクスは叱咤の思念を送ってきた。

—余計な事は考えない！—

—わかったわよ—

わたしは少しイラッとして、ルクスにぶつめた。

—集中集中！—

いたいけな女の子に叱られる23才の女か。

絵にならない！

わたしは集中して見せた。

力が、確実に相手を押し返して行く。

だが、相手も黙って言うなりにはなっていなかった。

押し返してくる。

ルクスは作戦を変えて、相手の指を、1本1本引き剥がしにかかる。

空間をつかんでいた指が、1本ずつ確実に剥がされていった。

相手の右手の指が、最後の1本になったところで、ルクスが思いっきり、相手の右手に力をぶつめた。

右手が外れた。

化け物がつかみ直す前に、2撃目を加える。

素早くさらに3撃目。

今度は顔に当てた。

相手が思いきり怯んだ。

崩れた体勢を整えようとして、苦し紛れの反撃に出たが、上の目から放たれた黒い光は、わたしとルクスを逸れて、後ろの壁に穴を空けた。

わたしは別の意味で戦慄した！

修理費！！

工事費！！

頭が真っ白になって、顔が真っ赤になった。

ルクスが笑った気がした。

—いいかんじ〜！—

—ちょっとー！—

—気が乗ったところで、行くよー

おそらくフルパワーではないが、かなり良いタイミングで、今までの力に2倍程度のパワーを、残った左手に向けた。

パワーが当たった瞬間に、相手が苦しがつたのか、今まで見えなかった口が開いて、白い、歯のような物をニーッと見せた。

笑ったのかとも思えたが……。

次の瞬間に左手も離されて、死獣は空間の奥に吸い込まれるように消えていった。

空間の裂け目がスッと閉まり、何もなかったかのように、通常の風景に戻った。

ただ1つ、死獣が空けた壁の穴だけが残った。

ルクスがホッと溜息をついてわたしの身体から離れて、わたしは壁の穴を見て気が重くなった。

宇宙人の憂鬱 13

ルクスは壁の穴を、濟まなそうな、なんとも悲しげな眼差しで眺めやった。

わたしは、仕方ないわね、と言いながら、脇にかかっていたカレンダーの鉾を外して、穴を塞ぐようにかけ直した。

「気にしないで良いよ」

わたしはルクスに声をかけたが、内心は、思わぬ散財に、財布の中身を気にしていた。いくらかかるのかな？

そんな気持ちを察してか、スクスはまた、悲しそうにわたしの肩に手を置いて、ごめんね、こんな事に巻き込んで、と言った。

わたしはルクスの苦しげな声を聴いて、どう答えたら良いのかわからなくなってしまった。

「ねえ、テレビか動画でも見る？」

「見たくない。今は考えないといけない事が、たくさんあるの……、ありがとう」

わたしの肩から離れると、ルクスは弱々しい声で言った。

「わたしに出来る事はある？」

ルクスは黙り込んでしまった。

「わたしに詳しい説明はないの？」

まだ黙ったままである。

「もう巻き込まれてんのよ？遠慮無しに打ち明けてよ」

わたしは言ったが、ルクスは考え込んでしまって、何も答えてはくれなかった。

「あなた！本当に助けてくれるの？なにも教えてもらえないまま戦うなんて、わたしには難しい。せめて事情を話してよ！」

わたしは少々大きな声を出してしまった。

つい感情が前面に出て、声を張り上げてしまったのだが、少しだけ反省した。

小さな女の子に、大きな声を上げるなど、大人のする事ではない。

わたしはルクスに謝った。

「ごめんねルクス。大きな声を出してしまって」

ルクスは首を大きく振って、わたしに背中をもたせかけるようにして、うつむいた。

「いいの。わたしが悪いの」

「わたしも、本当のところはよくわかっていないのよ。だから、詳しくは答えられないの」

「霊界の掟とでも言うか、決まりで、わたしは記憶を一部だけ、封印されているのよ」

ルクスは途切れ途切れに言葉をつないで、一気にそれだけ言った。

「封印？」

わたしはルクスに尋ねた。

「その封印されたところが、大事な、敵についての情報だったわけね」

わたしの言葉に、ルクスは「たぶん」と、答えた。

わたしは顎を押さえて黙り込んだ。

小説やマンガなどのパターンだと、これは見方の中にスパイや敵本人が混じっているって設定だね。

わたしはオタクの本領発揮で、状況をそれなりに分析して見る。

そうすると、やはり、状況が把握できていないのは、あまり思わしくないな。

ただでさえ得体の知れないおかしな化け物なのに、相手の事が何にもわからないんじや、お話にならない。

「だけど、化け物の特徴は、教えてもらえるんでしょ？」

「それはもちろん。そんなのにまで制限をつけていたんじや、戦えないもんね」

それはそうだ。

取り敢えず、対処法は教えてもらえるって分けたね。

でもそれだけ。

酷い話だ。

って、戦う前提???

わたしが守ってもらって事じゃなかったの???

「まもるわ。もちろん全力で」

ルクスは力強く言ってくれているが、このか弱そうな幽霊さんには、何か秘密のパワーとか、そういったものが隠されてでもいるのだろうか。

わたしはそうあって欲しいと願いつつも、時計を見ると、もう、24時を過ぎている事がわかったので、シャワーを浴びて、寝る事にした。

ルクスにも、休むように言ってみたが、幽霊は眠らないんだとか言って、一晩中、わ

たしの警護をしてくれるらしい。

わたしはシャワーをパッパと済ませ、着替えて布団を引っ張り出して、一気に眠りに落ちた。

宇宙人の憂鬱 14

今朝は少し早めに目が覚めた。

時計を見ると、4時30分だった。

もうこの時間はかなり明るかったが、わたしはまだ少し眠かった。

それでもノソノソと布団から抜け出して、ジャージとTシャツに着替えると、下駄箱からピンクのスニーカーを取り出した。

フェイスタオルを首に巻き、玄関を出て、階段を降り、河原まで2キロ、走ることにした。

アパートを出ると、新聞配達と、牛乳配達のバイクや車とすれ違った。

軽くジョギングで、30分もあれば行ける距離に、目的の河原はあった。

本当は休日に、運動不足を解消するために走っているのだが、今日は早く起きたので、走ることに決めた。

まだ、外の空気は冷たいから、汗はそんなに出なかった。

この辺りはまだまだ自然の残る、都会からは離れた地域である。

雀や様々な鳥の声、蛙の声、木々の葉の擦れる音などが数多きこえてくる。

気持ちのいい空気を肺一杯に吸い込みながら、もう息も白くはならない程度の冷たさに、気持ちをリフレッシュリフレッシュする効果を感じながら、軽く足を繰り返す。

風が吹いて、草木の葉が揺れる。

町内会長のおばあさんが、わたしを見つけて声をかけてくる。

わたしは大きく手を降って、返事をする。

暫く行くと、カラスが車に惹かれた猫の死体をついばんでいた。

わたしは、朝からあまり良いものを見なかったなと思い、そっと心の中で手を合わせる。

更に行くと、押しボタン式の信号機が見えてきた。

この信号機は時間によって、押しボタンになったり、普通の時差式信号になったりする。

今の時間はまだ、押しボタン式だったので、わたしはボタンを押して、横断可能になる合図を待った。

暫く待つと、信号が点滅して、通行可能の合図になる。

視覚障害者のために、音声の流れ始めて、わたしは勢い良く渡り始める。

この時間、いつもならば走っている人が何人かいるのだが、今日に限っては、誰一人居なかった。

寂しいなと思っていたら、ルクスがひょっこりと顔を出した。

「おはよう」

わたしはルクスに声をかけた。

ルクスはニッコリと微笑んで、「おはよう」と答えた。

もう10分も走れば、目的の河原へ到着する。

わたしは少し、スピードを上げた。

ルクスは幽霊なので、疲れも見せずに、空を滑って、スルスルとついてくる。

途中で何人か、ランニングをしている人たちにすれ違ったが、誰もルクスには、気が付かなかった。

ルクスが普通の人間には見えないと分かっているけど、自分がつく別な人間だと思えないわたしには、不思議に思えてならなかった。

ルクスは、「もうすぐなの？」と、わたしに聞いてきた。

わたしは、「もう見えてきたわ」と、答えた。

実際にもうゴールはすぐそこだった。

わたしはスピードを緩めて、景色を楽しむように、ゆっくりと足を運んだ。

桜はとっくの昔に散ってしまっている。

もう6月である。

暖かい空気が、新緑を目覚めさせる季節である。

桜などは、もう枝と葉っぱだけになってしまっている。

もう3月も前ならば、この河原は桜並木で美しいのだが、今はその面影もない。

それでも木々の立ち並ぶ姿が、朝日に映えて美しい。

この景色を見るためだけに、わたしは早起きをして、休日は、ジョギングを行っているのだ。

日課と言うほど毎日ではないが、わたしのリフレッシュする一時である。

やっと、河原に到着して、柔軟体操をやってから、周りの景色や、河の流れを楽しんで、十分に堪能してから、また、帰路についた。

その間、ルクスは黙って、わたしを見ていてくれた。

それが本当にありがたかった。

昨日のことを切り替えて整理するためには、こういった時間が必要だった。

このような時間がなければ、わたしの頭は混乱したままだった。

まあ、今でも混乱してはいたのだが…。

宇宙人の憂鬱 15

スマホの時計を見た。

ドジなわたしは、今日が休日だった事を、その時初めて知った。

休みだと知っていたら、もう少し寝ていたのに。

ほんの少しだけ悔やまれたが、もう過ぎた事だった。

わたしは、どうせ今日は休みなのだから、のんびり行こうと思って、景色を見ながら歩いて帰る事にした。

「ルクス、太陽の下に出てきても大丈夫なの？」

脇を、ふわふわと漂うルクスに尋ねた。

「多分大丈夫」

何事もなさそうに、ルクスは笑顔である。

幽霊と言えば夜と決めてかかるのは、多分間違いなのだろう。

「なんか、こっちを見ている人が居るよ」

ルクスがそう言うので、わたしは歩きながら、視線を漂わせる。

そうすると、確かにこちらを見ている女性が居た。

服装も違うし、背丈も少し伸びているような気がしたし、雰囲気がいぶ違うようだけれども、わたしを見ている女は、わたしが中学までに虐められた相手だった。

今さらどうという事もなかったが、やはり過去を思い出して、苦手意識が先に立った。

わたしはその女性の方を見ないようにして、サッと通り過ぎようと思った。

確か、康代、と言ったか。

#吉田 康代--よしだ やすよ--#、彼女はそんな名前だった。

昔の虐められた思い出が、フラッシュバックする。

トイレに閉じ込められて、水をかけられたり、髪をつかまれて、顔を叩かれたり、そういうことが日常だった。

凄惨な思い出。

なんでわたしだけが、そう思って生きていた。

階段から突き落とされたり、登校中に服を破られる事もあった。

もっと酷いのは、相談に行った担任に、保健室に憑いてくるように言われて、押し倒されて胸を揉まれたりした記憶が駆け巡る。

思い出したくない過去の思い出を思い出させられた。

担任に押し倒された時は、幸いにも大声が出せたので、胸を揉まれる以上の事はなかったのだが、わたしの胸を揉んだ担任はと言うと、懲戒処分にはならず、減俸程度で済んだと言うから、その時はさすがに神さえも呪ってしまった。

担任はその後、どこかに転勤させられたが、教師は続けていたらしい。

小中学生の頃は、死ぬ気力すらも無く、ただ毎日を過ごしていた。

不登校にならなかったのは、ひとえに両親の支えがあったからだが、それでもやはり、辛くて泣いてばかりいた。

ただ、わたしにも意地があって、虐めてきた相手の居る前では、絶対に涙を見せる事はなかった。

思い出を打ち消そうとして、そそくさと逃げだそうとしているのがわかってしまったのか、吉田康代はこちらへ歩み寄ってくる。

逃げ出すわたしへ、「魚子じゃないか、久しぶり」、と、さも、何もなかった旧知の友のような顔で声をかけてきた。

わたしは引きつった笑顔で相手を迎え撃たなければならなかった。

「久しぶり…」

「実は、あんたに相談があるんだよ」

と、吉田は気軽にわたしの肩をポンと叩く。

わたしは、なに言ってんだよ！コイツ！と言う思いを胸に押し込めて、笑顔をさらに引きつらせた。

「わたし、急いでるんで、じゃあね！」

どもりがちに、口元をピクピクと引きつらせながら、吉田を振り払う。

「おい！」

さらに食い下がってくるのかと思ったが、その一言だけで、今回は見逃してくれたようだ。

ただ、彼女の表情を確認したが、アレはまだしつこくわたしに付きまとしてこようとする者の表情に思えた。

わたしは、忘れたい過去の思い出を振り払おうと、小走りにその場を脱した。

朝の気持ちいい気分が、この事件で最悪な状態になった。

宇宙人の憂鬱 16

まだついてくる！

吉田康代は、まだしつこくわたしの50メートルくらい後ろをウロウロしている。

わたしがスピードを上げたら、やっとあきらめてくれたらしく、彼女の姿が見えなくなった。

いったい何のつもりで？

まさか、また何か、わたしを虐めて楽しもうとでも言うのだろうか？

学生時代の続きを？

冗談じゃない！

あの地獄からやっと立ち直ったのだ。

もうあのときの関係者など、見たくもないし、関わり合いに成のも嫌だった。

わたしは虐められていた時の恐怖心よりも、怒りの感情が、身体全体を支配していた。多分マンガやアニメならば、メラメラと身体から真っ赤な炎が吹き出しているところだろう。

わたしは両手の拳を握りしめて、やり場のない怒りに、叫び出したい思いをグッと押し込めて、近くの自販機で、缶コーヒーを買った。

怒りで喉が渇いてしまった。

額に汗がつたい落ちたので、タオルで拭いた。

それから、近くの街路樹の下にベンチが二脚置かれているのを見つけて、休む事に決めた。

気持ちを落ち着かせる意味もあって、深呼吸を¹回行ってから、缶コーヒーを口にしました。

パープルのテカテカキラキラのジャージに、木漏れ日が揺れて、風が心地よくうなじを撫でた。

わたしはショートヘアーが、サラサラと風になびいて、心地よい冷たさが、汗をかいた肌を刺激する。

気持ちよくなって、缶を脇に置くと、両手でふわりと髪をかき上げた。

そう言えば、メガネがあったっけ。

思いだし、ポケットから伊達メガネの入ったケースを取り出した。

変装になるかなと思い、辺りを見回して、吉田康代がないのを確認してから、メガネをかけた。

レンズは入っていないが、赤い縁の、大きめの眼鏡である。

ルクスがわたしの姿を見て、「可愛い！」と言ってくれたのが、唯一の救いだった。

学生時代には、可愛いといってくれた同性など、母親くらいのものであった。

わたしはルクスに、あなたの方が何倍も可愛いのよ？と返すと、そうかな〜と首をかしげて、二人で声を出して笑った。

わたしはコーヒーを飲み終わると、空き缶を、自販機の脇にあるゴミ入れにいてから、大きく伸びをして、歩き始めた。

嫌な気分を吹き飛ばし、リフレッシュのやり直しである。

良い気分アパートに戻ってくると、一瞬で気分がガタ落ちになった。

アパートの前に、吉田康代が待ち構えていたのである。

わたしは変装がばれていないよねと思いながら、軽く会釈だけして、彼女の脇を通り過ぎようとした。

だが、康代は、わたしの腕をぐいとつかんで、引き戻そうとした。

わたしは、「何すんの！」と叫んで振り払おうとしたが、康代はしつこかった。

「なんのつもりですか」

わたしは精一杯気丈に振る舞ったが、内心は、怖くて仕方がなかった。

「悪かった、謝る」

康代の言葉に、わたしはまじまじと彼女を見返した。

康代は、薄い紺のジーンズ姿に、胸の所にキャラクターのプリントがある、黒のロングTシャツを着ていた。

「すまなかった、あんたを見かけて、謝りたかったんだ」康代は俯き加減で、わたしと目を合わせるのが怖いとでも言うように、小声で言った。

何の事？

そう思ったが、彼女の表情が、何かを思い詰めているように見えたので、少しだけ我慢してみた。

「中学小学と、虐めて悪かったよ」

今さら！そう思ったが、何故か声にはならなかった。

わたしは怒りで、彼女の頬を張り倒してやりたいと思ったが、なんだかそれも出来なかった。

彼女の症状を見てしまったからだ。

何か思い詰めた、硬い顔をしていた。

それに、肩をガククリと落として、力のない表情の康代を見ていると、なんだかこっちが虐めているような気になってくる。

「何かあったの？」

わたしは彼女に聞いた。

ルクスは思念波で、一お人好しだねーと言って、頭の中で笑った。

吉田康代は、話し始めようとしたが、立ち話は人目もあるから、わたしは不本意ながら、彼女を部屋へ招き入れた。

宇宙人の憂鬱 17.

「なんで今になって」

言っても時間は巻き戻せない。

でも、言わないわけにはいかなかった。

感情的になって、わだかまっていたものを、全てぶちまけていた。

気が付いたら30分は過ぎていたろうか。

わたしは思いの丈を吉田康代に向かってぶちまけた。

康代は黙って聞いていたが、わたしが話し終わると、重い口を開いた。

「ずっと誤りたかったんだ。だけど、そのチャンスがなくて・・・」

「今がチャンスなの？わたしはずっと待っていたのに！」

「すまなかった」

「なんで今になってなの？」

わたしは憤った気持ちをなんとか抑え込んで、それでも康代を睨みながら言った。

「実は、あんたのことを夢で見るようになったんだよ。わたしのことを助けてくれるのは、貴方しかいないって、夢で見たんだ」

わたしは、呆れて声が出なかった。

それでもなんとか声を絞り出したものだから、少しおかしな調子になってしまった。

「はあ～、ナニイッテンの？わたしが、貴方を？どうしてよ」

無理して声を絞り出したものだから、かなり変になって聞こえたはずだ。

「うちの母が、1年くらい前から変になっちゃって、それからなんだ、あんたの夢を

見るようになって、気になってあんたを見張ったり、霊媒師のところへも行ってみたい
りした」

康代はなにか思いつめた様子で、俯きながら話しを続けた。

「あんたには強力な霊が憑いていて、それがわたしの母の状態を治してくれるって、
そう言っていた」

康代は何を言っているのだろうか？

わたしに？霊が？強力な？

笑いだしたくなるのを、必死でこらえた。

「わたしだって信じられなかった。でも、霊媒はそう言っていた。あんたがわたしを
救うんだって」

必死の形相の康代を見ていると、少し残虐な気持ちになった。

まるで、学生時代と立場が逆になったような気がして、やり返してやりたい！虐め返
したい！という気持ちが、ムクムクと起き上がってきた。

嫌な気持ちだった。

本当に、嫌な気分だった。

まさか自分がこんな気持ちになるなんて！

絶対に人は虐めない！そう思っていたのに！

康代の姿を見たら、虐めたい気持ちが、復習したい気持ちが、どうにもとまらない負
の感情が、わたしを焼きそうになる。

自分自身こんなに否な人間だったなんて、今まで気が付かなかった！

わたしは泣き笑いした。

康代は何事かとわたしを見たが、かまうことはなかった。

一番忌み嫌っていた人種と同じ感情が、自分の中に有ったなんて、今まで気が付かな
かった。

所詮わたしもその程度の人間だったわけだ。

でも、簡単に許せるような人間だったら、わたしは生きてさえもいなかっただろう。

わたしが自身に絶望していると、ルクスが話しかけてきた。

「話を聞くだけ聞いてみよう」

ルクスがそう言ってくれたので、わたしは康代の話聞いてみる気になった。

どうしてわたしがメシア様なのか？？興味があるじゃない！

「過去のことは置いといて、話だけは聞いてあげる」

私は少々高飛車な物言いをした。

宇宙人の憂鬱 18

吉田康代は、わたしに向かって、頭を下げてきた。

まさかこのような態度に出られるとは、思っていなかったので、少々驚きと、多少

の優越感が、わたしの心を支配した。

わたしは、自分にこのような心根が有った事に、再度失望した。

わたし自身が、今まで憎んでいた相手と同じだったという事実。

これはどう言いつくろっても言い逃れの出来ない事実であった。

康代に対して抱く気持ちが、濃くなればなるほど、どうしようもなく嫌な高揚感さえも感じていた。

わたしは、このような自分を嫌悪しながらも、仕方がないよね、と、許してしまう自分がいる事に、さらに嫌悪感と驚きを覚えた。

康代が、「頼む、わたしの母を助けてください」と言って、再度、頭を下げた時には、心の葛藤が治まらずに、どう答えたら良いのか解らず、悩んだ。

ルクスがわたしの様子を見取って、注意を引くために、わたしの眼前で、手を振って見せた。

ルクスは、今のところは、わたし以外の人間には見えていないようである。

霊の見える類いの人であれば、ルクスの姿を確認出来るのだろうけれど、わたしのまわりには、そういった能力を持った者は居なかった。

少なくとも、自分から霊が見えると言い張る者は居なかった。

本当はいるのかもしれないが、それは確認のしようがない。

「この人を助けてあげよう」

ルクスがそっと、わたしに伝えてきた。

もちろんその声は、康代には聞こえない。

わたしはなんで、と言う疑問を、声にして言うところだった。

ルクスは、「この人を助ける事が、あなたの多時化になるかも」とだけ言って、そっとわたしをつかむ仕草をした。

霊的な事は解らないが、ルクスの言う事だから、何かあるのだろう。

それに、嫌な感情を抱いたままでは、わたし自身が、わたしを嫌いになってしまう。

負の感情に身を委ねるのは、一時の快楽を得るだけだ。

でも、わたしの中ではそれほど簡単には、気持ちの整理が出来なかった。

だから、ルクスの判断に頼ってしまった。

「わかった、話を聞かせて」

わたしは、俯く康代に手を差し伸べた。

本当は、あのとき自分がそうして欲しかったのだと、そう思いながらも、彼女を救えば、何かが変わるのかなと言う思いを込めた動作だった。

康代は薄く、涙を浮かべていた。

この人は、母親のために泣ける人だったんだ、わたしは彼女に対する認識を、少しだけ改めた。

なぜあのときに、と言う思いもあったが、それが康代の成長ならば、そう思いつつも、

やはり許せるものではなかった。

康代は淡々と話し始めた。

ある日、康代が家に帰ってみると、母が狂ってしまって、家中を散らかしてまわっているのを発見した事。

なんとか母親を静かにさせて、救急車を呼んで、大病院へ連れて行った事。

検査をしても原因がわからずに、そのまま精神病院へ行かされた事。

一週間入院して、なんとか薬で正気を保てるまでになった事。

それから、八方手を尽くして、霊媒師などのところへ行ったりした事を話してくれた。もちろん精神病院にはずっと通院しているが、実はまだ、病名もつけられないのだという。

それから、涙ながらに自分の生い立ちも語った。

幼い頃に、父が亡くなって、それから母と二人、寄り添って暮らしてきた事などは、わたしの知らない一面だった。

そしてまた、彼女も家庭の事で虐めに遭っていたのだという事が語られた。

彼女も辛かったのだ。

わたしはほんの少し溜飲が下がる思いだったが、人の痛みがわかる人が、なぜ？と言う気持ちがあった。

わたしはルクスを見た。

ルクスは、「お母さんに会ってみよう」と言って、わたしの肩を叩く仕草をした。

わたしは康代に、お母さんの容態を診せてくれない？と言って、手近にあったティッシュで、彼女の涙を拭いてあげた。

宇宙人の憂鬱 19

康代は乗ってきた自分のバイクの後ろに、わたしを乗せて、ヘルメットを被らせてから、しっかりつかまっているように言って、バイクを走らせた。

バイクは、郵便局仕様の赤いスーパーカブを改造したもので、正規に改造申請をしたものだと言っていた。

125ccだったが、彼女は免許があるから大丈夫と言っていた。

わたしは恐る恐るバイクに乗かって、彼女の運転に、身を任せた。

バイクの二人乗りなんてはじめてだったので、ジェットコースターよりも恐怖を感じた。

彼女のうちは、確か私の実家から近い。

帰りには、久しぶりに、実家に泊まろうか、などと考えていると、いつの間にか小高い坂道を登り切っていた。

景色がぐるぐると、目まぐるしくまわって、そうやって30分くらいバイクに揺られていたのだろうか。

丘の下に駅が見えてきた。

懐かしい風景に、少しだけ、心が荒んだ。

嫌な思い出だけが蘇る。

気持ちが暗くなって、テンションもガタ落ちである。

ただ、あのときわたしを虐めていた女の背につかまって、バイクに乗って居るのだと思うと、不思議な気分だった。

#蟬り--わだかまり--#が完全に解けたわけではないのだが、なんだか少し気分が楽になったような、心が軽くなったとでも言うような、そんな気分だった。

でも、なんでわたしなのだろう。

夢に出てきたとか、霊能者が言っていたとか言われても、わたしには何が何だかよくわからなかった。

—後で、吉田康代さんに聞いてみたら？—

ルクスが語りかけてきた。

ヘルメットをしていても聞こえるのって、凄く便利だ、などと、バカな事を言っていると、ルクスがケラケラと笑った。

自分でも不思議なのだが、ルクスに思考を読み取られても、全然嫌な気持ちにはならなかった。

ルクスの人柄なのか、怪しい術にかけられて、そういった感情が湧き出さないようにされているのか、わたしには判断できなかった。

そう考えた事も、ルクスには筒抜けだった。

ルクスが言うには、—あなたが優しい人だから—、なのだそうだ。

さっきまでのわたしは、嫌な感情に吞まれていた。

それでも優しい人間と評してくれるの？

ルクスの方が余程優しい！

バイクが右へ、左へと揺れる度に、わたしは振り落とされないように、吉田康代の胴体に、必死でしがみついた。

何個目か、数も忘れるほどの信号機を通り過ぎて、何階目か忘れるほど多くの信号で止まり、坂を上下し、交差点を横切り、見慣れない町へ帰ってきた。

町は、わたしがしばらく離れただけで、全然違う様相を見せていた。

スーパーやコンビニが増えたのは、田舎ならではと言った所か。

スーパー銭湯なるものも、途中で何件か見かけた。

でも、人気が疎らだった。

それも、田舎の風景かも知れない。

犬を連れた人に、何人か出会った。

のどかな感じは、人によっては住みやすい場所と感ずるかも知れないが、わたしはこの重苦しい空気が、嫌でたまらなかった。

本当に、嫌な思い出だけが思い出される町である。

宇宙人の憂鬱 20

思い出すのも嫌な記憶しかない町を走り抜けて、ようやく、目的地にたどり着いたようである。

吉田康代は、バイクを止めて、エンジンのスイッチを切った。

そして、わたしに降りるように言うと、自分はヘルメットを取り、それをホルダーに取り付けて、溜息を漏らした。

眼の前の家は、あまり小さくなくて、ごく普通の建物だった。

わたしは、あの当時、靖子は良いところの娘だと思いこんでいた。

彼女の事情など、わからなかったし、他人のことなど考えている余裕すらなかった。

わたしはバイクを降りると、ヘルメットを取って、康代に渡した。

康代はヘルメットを自分のものと同じ様に引っ掛けると、自身もバイクを降りた。

「こっちだよ」

と言って、先に立って玄関に入っていった。

本当にごく普通の家。

わたしの実家をもっと小さな家だけれど、それほど大した違いはないか。

こじんまりした玄関だったが、整理されて、掃除も行き届いていた。

華美な家具など置いてなかったが、むしろ気持ちの良い玄関だった。

「来いよ」

康代は中へと案内してくれた。

玄関からすぐの、右側に階段があり、上がってすぐから真っ直ぐに奥へ通じる廊下がある。

左側にも通路が伸びていて、そちらには台所があった。

まっすぐの廊下の行き詰まりには、風呂とトイレがあり、その途中の、左側には、居間ともう一つ奥に部屋があった。

そこが、母親の寝室に使われていた。

階段の上の部屋は、多分、康代の部屋だろう。

わたしはもちろん、母親の所へ案内された。

それにしても、まったく無駄なものはない家だ。

これだけシンプルだと、気持ちいい。

わたしも、小物とか揃えるのが苦手なものだから、案外康代とは趣味が合うのかも知れない。

吉田康代は、わたしの持っていたイメージとは、かなり違った一面を持っているようである。

襖の前に来た。

「ここだよ」

と、わたしに言ってから、

「母さん、帰ったよ。ただいま！」

と、奥の母親に声をかけた。

奥の母親は、なにか声を発していたが、わたしの位置からでは、襖が障壁になって、よく聞き取れなかった。

「開けるよ」

康代は、母の返事を待たずに、襖を開けた。

中はやはり、整理されて、清潔な感じだった。

寝たきり同然の母親も、痩せてはいたが、意外に血色が良い。

康代が母の世話を、ちゃんとやっているのだと、わたしは思えた。

「風呂は週3回、ヘルパーを使うけれどね」

康代は笑いながら言った。

康代の母は、血色が良かったが、わたしには、彼女の顔の辺りの空気が黒く見えた。

—霊障ってやつだよ—

ルクスが言った。

—わたしの言うとおりにやってみて—

ルクスはそう、わたしに言った。

—わたしが憑依するから、そうしたら、彼女の顔のところに手をかざしてみても—

言うなり、ルクスはわたしに入ってきた。

わたしは言われたとおりに、康代の母親の所へ近づいて、顔の靄を取り払うように、力をコントロールした。

康代の母親はビクンビクンと、30センチもベッドの上でハネ上がり、大きな唸り超えを上げた。

康代はわたしを止めようとしたが、わたしに憑依したルクスが、わたしの口を使って、鋭く彼女を静止した。

康代の母親のからだは、上下に激しくハネ上がり、うめき声も激しくなった。

わたしはもっとパワーを送り込まなければと思い、彼女に送る力を強めていった。

ルクスもいい調子！

と言ってわたしのやり方を支持してくれた。

10分位かかっただろうか、康代の母の体中から、モクモクと黒い煙のようなものが湧き出て、終いにはまるで絶叫のような轟音が響き渡り、スーッと黒い煙が離れて、ドサッという音とともに、康代の母の体が、ベッドの上に落ちた。

—終わったよ—

ルクスが言い、わたしの体から離れた。

わたしは疲労感が酷くて、その場に崩折れてしまった。

荒い息を吐きながら、「終わったよ」と、康代に伝えた。

康代は母親とわたしを見比べて、不安そうにしている。

母親が目を覚まさないからだが、ルクスがわたしに言ってきた通りのことを、康代に伝えてあげた。

「大丈夫、10分もすれば目立覚めるよ、安心して」

康代は信じて良いものかどうか、判断しかねていたようだが、様子を見えることにしたらしい。

わたしに、冷えた麦茶を持ってきてくれた。

私はそれを、一気に藻に干した。

宇宙人の憂鬱 21

ルクスは康代の母親の容態が気になると言うので、康代の母親が気がつくまでしばらく様子することになった。

隣の、畳の部屋で、わたしは康代と2人で、麦茶を飲んでいた。

袋菓子がテーブルの上にあったので、お腹の空いたわたしは、康代に断ってから、一つつまんだ。

バームクーヘンの袋菓子。

小さいので、あまりお腹は満たされなかった。

康代は小さな声で、「ありがとう、来てくれて」と言って、頭を垂れた。

わたしはどう返事をしたら良いのかわからずに、ただ軽く笑うしかなかった。

「わたし、あなたが羨ましかったんだ」

康代が話し始めた。

わたしのことが羨ましかったって？あなたが？

わたしは湧き上がる疑問符を、頭の隅に追いやってから、康代の話に耳を傾けた。

「あなたは両親が居て、わたしには、母しか居なかった」

「理由は話してくれなかったけれど、わたしが赤ちゃんの時に、離婚したんだって」

康代はここまで言って、息をついた。

わたしが黙っていると、また、彼女は続けた。

「小学校の入学式、普通なら、母親だけしか来ないのに、あなたの所は、両親が揃って、あなたに付き添って来ていた。それを見た時に、羨ましかったの」

わたしはあのときの事を思い出した。

確かに両親が来てくれた。

でも・・・

「最初は嫌がらせをしてやろうと思っただけ。けどはじめたら、止める事が出来なくなってしまう」

「段々と、楽しくなってきて、ストレスって言うの？それが無くなっていく感じが、

たまらなく気持ちよかった」

「だから・・・」

康代は素直に気持ちを話した。

わたしはどう受け止めれば良いのか……。

—彼女の言っている事は、本当の事のように—

ルクスがわたしにアドバイスをくれた。

わたしはどうしたら良いのか、すぐには決める事が出来なかった。

それだけで？という思いもあった。

だけれども、彼女の気持ちも、少しは理解できる。

「寂しかった、悔しかったの。虐める相手は、本当は、誰でも良かったの。本当にごめんね」

今更もう遅い。

そう思いながらも、心のどこかでわだかまっていたものだ、少しずつ、少しずつ解けてゆく気がして、怒りに似た気持ちも、徐々におさまってきた。

ほんの10分程度だったが、彼女と話せて良かった。

わたしが3個目のお菓子を口にして、麦茶を飲み干した時に、吉田康代の母が、ベッドの上に、むくりと身を起こして、まるでどこかわからない様子で、辺りを見回して言った。

「わたしはいったい・・・。」

両手を顔に当てて、俯き加減になった。

長い夢から覚めた、それで、混乱しているのだ、と、わたしには理解できた。

どうしてそう言えるのかは、わたしにも理解できなかったが、こんな様子をどこかで見たような気がして、これをデジャヴと言うのかと、はじめて実感出来た。

吉田康代は、涙して、母の名前を呼びながら、喜んで、母親に抱きついた。

わたしはなんだか一仕事終わった気がして、ホッと溜息が出た。

宇宙人の憂鬱 22.

まだ、焦点の定まらない瞳を、かろうじて、わたしと康代に向けて、何か問いたげに口を開けて、手を伸ばしている。

そんな母親を、泣き出しそうな顔で見つめる娘の姿を、わたしは複雑な気持ちで見つめていた。

ルクスは、無表情に、（まあ、この幽霊美少女は、表情もそれほど豊かと言うわけでは無いが）ジッと、わたしと同じ光景を見ていた。

彼女が何を考えているのか、全く解らなかったが、想像してみることはできた。

恐らく、わたしと大して変わらないのではないかと思う。

いじめっ子といじめられっ子、どこまで行っても、何も変わらないのかと思ったが、

康子の様子を見て、心がゆらいだ。

かわいそうとかそんな感情ではなかった。

では何？と言われても、正確な答えは、わたしにはわからなかった。

「康代、そちらの方は」

康代の母は、やっと、こちらに気が付いて、自分の娘に声をかけた。

まるで、感情が上手く表せない様子である。

わたしは、精神科医じゃ無いから解らないが、本当に、感情が上手く表せないのだろう。

康代の母に向かって、頭を軽く下げた。

「魚子です。#下山魚子--しもやまなこ--#。康代さんの友達です」

思わぬ言葉が、わたしの口から付いて出た。

康子はポカンと口を開けて、わたしを見ている。

ルクスも驚いた表情を見せていた。

わたし自身もかなり驚いているのだから、二人の反応は当然だろう。

「魚子さん、康子のお友達、よく来てくれました」

それだけ言うと、力を無くしたのか、また、ベッドに横たわった。

「疲れたの？」

康代が優しく声をかける。

「ちょっと疲れたみたい。なにもしてないのにね、変だよ」

康代の母は力なく言った。

「もう大丈夫だけど、一晚二晩は要注意ね」

ルクスがわたしに語りかけてきた。

「どう言う事？」

ルクスに問うた。

「体力が落ちている時は、霊に憑依されやすいのよ。特にこういう、憑依経験のある人はね」

ルクスは、経験豊富な医者のように、意見を述べた。

「どうすれば良い？泊まって看ている？」

わたしはこのままにしておいたら危ないというので、心配になって、ルクスに尋ねた。

ルクスはフフと笑って、「いい手があるのよ」

と言った。

いい手とは何か、わかるまで数分もかからなかった。

「康代さんに、紙とペンを用意させてくれるかな」

ルクスはわたしに指示を出す。

わたしは言われたとおりに、康代に、ペンと紙を頼んだ。

康代は奥の整理棚から、ペンとノートを持ってきた。

「これで良い？」

—良いよ—

ルクスが言ったので、その通りにわたしは康代に言った。

そして、康代から、紙とペンを受け取る。

瞬間、いきなりルクスがわたしに憑依してきた。

そして、わたしの体を操り、左手で、紙に模様を書き込んでいった。

—護符よ—

ルクスが言った。

数分で書き終わった。

見た事のない複雑な文様だった。

わたしには、どんな意味があるのか、全然わからなかった。

—左手で書く必要があるの？—

わたしが聞くと、ルクスが笑ったような、そんな感覚が、体に伝わってきた。

—わたしが、生きていた頃は左利きだったのよ—

そう言って、わたしの体から離れた。

—この護符を、お母さんの枕の下に置いておくと良いて、伝えてくれるかな—

ルクスが言ったので、そのまま、わたしは康代に伝えた。

—これで大丈夫、必ず良くなる。そう伝えてくれるかな—

わたしは、ルクスに言われたとおりにつたえる事しか出来なかった。

康代は、紙切れを受け取ると、母の頭をそっと持ち上げて、枕カバーの間に、護符をしのばせた。

そしてまた、母の頭をゆっくりと、枕につけた。

—もうおいとましても良いかな。それに、彼女とは、縁がありそうだよ—

わたしは、ルクスが何を言っているか解らなかったが、おいとました気持ちだけは同意したかった。

だから、「康代さん、わたし行くね。もう大丈夫みたいよ」と、声をかけた。

康代も、これ以上わたしをとどめ置く理由も無かったので、送って行ってくれると言ってくれた。

わたしはバイクにまたがった。

運転はもちろん康代が担当して、康代の家から 10 分くらいの距離にある、私の実家までおくってくれた。

別れ際に、康代は何度も頭を下げてお礼を言ってくれた。

本当に彼女の母親が治ったのか、わたしには自信が無かったのだが、近くに居た彼女は、その容態の変化が著しい事がわかったのだろう、涙を流して、わたしにお礼を言った。

わたしは、賞賛されるべきはルクスである事を知っていたが、それは伝える事は出来

なかった。

ルクスは彼女には見えないからだ。

わたしはルクスにそっと感謝を伝えた。

—どういたしまして—

ルクスは静かに答えた。

宇宙人の憂鬱 23.

久しぶりの実家だ！

最近忙しさにかまけて、実家に帰るのを控えていたものだから、12ヶ月振りの帰郷である。

まあ、帰ってこいと、電話もないのだから、両親は元気だろう。

わたしが家を出た時には中学生だった弟も、もう高校³年のはず。

留年してなければだが。

わたしは家の玄関口のドアベルを押した。

中の反応は無かったが、ドアに鍵がかかっていなかったなので、勝手に入る。

自分の実家なんだから、良いよね？などと自問自答しながらも、玄関で靴を脱いで、中へと上がり込む。

誰かいらないのかな？

わたしは声をかけようとしたが、後ろから人の気配がしたので、振り返った。

Tシャツにジーンズ姿の母と目が合った。

両手には買い物袋が提げられていた。

不用心にも、カギもかけずに、近所のスーパーへお買い物だったらしい。

父が知ったら、何をやっているんだと、母を叱っただろう。

母は見るからに、少し痩せた気がする。

頬がこけたような印象だった。

母は、わたしの姿に驚いたようだったが、次の瞬間にはやさしく笑いかけて、どうしたの？こんな時間にと、言った。

わたしは事情を話しても信じてもらえないとわかっていたので、適当な言い訳として、久しぶりに顔が見たかったのよ、と言った。

ルクスは、—嘘がヘタね—と言って、脇で笑っていた。

母には当然ルクスは見えないと思っていたが、そうでは無かったらしい。

「ルクスちゃん、元気だった？」

母の口から発せられた言葉に、わたしは驚きを通り越し、啞然とした。

「母さん、ルクスが見えるの？」

わたしが素っ頓狂な声を発したので、母は声を上げて笑った。

「知っていたわよ」

事もなげに言う。

—珠世は、わたしの古くからの友人よ—

ルクスも笑う。

珠世と言うのはわたしの母の名前だ。

#下山 珠世--しもやま たまよ--#それが母のフルネームだ。

母は、わたしに中へ入るように言うと、手にした買い物カゴを持って、奥の台所へと消えていった。

わたしは居間の、³人掛けのソファに腰をかけて、ポケットと辺りを眺めていると、母が冷たい緑茶を持ってきてくれた。

わたしはガラスのコップに入った緑茶をいただくと、母にルクスとの事を聞いてみた。

「昔から知ってるって、どう言う事なの？」

わたしが尋ねると、母は昔を懐かしむように、話し始めた。

「ルクスはね、お婆ちゃんよりも更に前のご先祖様の代からうちに縁のある守護霊様なの」

守護霊？

神様みたいなものかな？

わたしはそういった世界の物事は、よくわからなかった。

「あなたにルクスが憑いたって事は、あなたも運が向いてくるかもしれないわよ。わたしの時も、お父さんと出会えたり、家の借金が返済できる切っ掛けが出来たり、兎に角運気が上昇するのよ」

と言って、娘の幸運を喜んでいる様子だった。

ルクスはと言うと、暗い面持ちで、軽く笑った。

わたしはその、ルクスの様子と、先ほどの事件とを考え合わせて、ただそれだけのために彼女がわたしの所へ来たのだとは思えなかった。

頭の中でそっと質問を送った。

—それだけじゃ、無いよね？—

ルクスは³秒ほど沈黙して、それから答えてくれた。

—そうよ。あなたのはちょっと複雑なのよ。なんせあなたは生まれ変わりのだから—

何を言っているのだろう？

わたしは何か脳裏に浮かんだ気がしたが、それがなにだったのかハッキリと意識する前に消え去った。

何か重要なものの気がした。

わたしはルクスが何を隠しているのか注意しなければならないと、彼女に対する態度を改めなければならないと思った。

宇宙人の憂鬱 24.

母はルクスと親しげに話している。

まるで、旧友にでも再会したように、嬉しそうだ。

それにしても、母にも、と言うか、私の一族って、靈感があったんだ！

なんだか不思議な感じだな。

そんなこと、教えてもらったこともない。

守秘義務のような、秘密の伝承なのか？

時が来たら伝える、的な？

謎の幽霊美少女ルクスに、古から伝わる古き力の伝承者であるわたし。

冒険の匂い！

なんて、そんなに甘くはないことは理解できている。

わたしは、それほどバカではない。

—わたしって、明治って元号の時に生まれたのよ。何年かはおぼえてないけれど—
ルクスが、自分の生まれた時代の事を話しはじめた。

わたしはしばらく聴いてみる事にした。

—あのときは、日本の国と、露西亜の国が戦争をやっていて、わたしの父さんは、足を1本失って帰って来た—

—お父さんは大工をやっていたから、足が無くなっちゃうと、仕事が出来なくなって、それで荒れ狂って、家族に暴力を振るうようになったの。そして、わたしにも手をかけるようになって、最初のうちは母もわたしを庇ってくれた。でも、最後には疲れ果てて、わたしを庇うどころか、父と一緒にわたしを殺したのよ—

幽霊になると、感情が薄くなるのか、それとも感覚がズレてしまうのか、ルクスは何事も無かったように言ってのけた。

わたしは何を言われても驚かなかったが、それでも、ルクスをハグしてやりたくなった。

「わたしがルクスと話しが出来るようになったのは、高校1年の時だった」

母が話しはじめた。

ルクスとのなれそめを話してくれるらしい。

「高1の時、わたしが原付の免許を取ったばかりの頃。バイクに乗って通学していた時に、アルバイト先で出会ったのよ」

母がアルバイト。

母の高校生姿を想像すると、不思議な気がした。

「焼きたてパンの食べられる喫茶店で、バイトしていたのよ。そのお店って、出るって噂のあるところだったのだけれども、わたしはその事を知らなくてね。一緒にバイトしていた女の子がその霊に憑依されて、助けてくれたのが、ルクスだったの」

「たしか、その子があなたにつかみかかっているところを、わたしが見て、危ないと思ってあなた憑依して助けたんだよね」

「あの時は本当に恐かった。それと、そのあと高校を卒業するまで、心霊事件を解決する事になるなんて、思わなかったけれどね」

「一本当は、巻き込みたくななんてなかったんだけど、あなたの力が必要だった。あなたの先祖からの約束でもあったしね」

ルクスは悪霊となって、自分を殺した両親を呪っていたのだが、その時に、霊能師だったわたしの曾祖母が偶然に通りがかって、彼女を鎮めて、式霊にしたらしい。

ルクスは生前、霊能力が強かったらしく、成仏できないくらいに強力な悪霊になっていたらしい。

曾祖母も相当に強かったらしいのだけれど、それでもルクスを完全に浄化するのは無理だったらしく、神にして、彼女を今の状況から救ってやる代わりに、今後生まれるであろう、自分の子孫、霊能力を持った子孫を助けてやって欲しいと願ったらしい。ルクスはさらりと語ってくれた。

どう言う理由でその願いを受けたのかは、彼女の口からは聞けなかった。

母は、若い時に同じ事を聞かされていたのだろう、なにも言わなかったが、懐かしそうに聞いていた。

そして、「こんどはあなたの順番ね」と、わたしにささやいた。

わたしはなぜだか、背筋に冷たいものが走った。

宇宙人の憂鬱 25.

母も、わたしにはなぜか、ルクスとの冒険、と言うかルクスとの活動を詳しく話してくれる事は無かった。

なぜかわざと話しをしてくれない気がして、聞いてみようにもそういった雰囲気ですらならないように気を遣われているような、不思議な空気だった。

母ばかりでは無く、ルクスにも尋ねるチャンスが巡ってこなかった。

空気を破って強引に聞き出せば、何かこの関係が壊れそうな気がして、嫌な予感が脳裏を貫いた。

「今は、言う事が出来ないのよ。あなたの準備がまだ出来ていないようなので、真実をそのまま話す事が出来ないの。だからもうちょっと待ってね」

ルクスはわたしの心の中を読んだのだろう。

自分を信じてくれとでも言うのだろうか、おそらくそういった意味で言ったのだろう。

「いつまで待てば良いのかな？」

わたしは意地悪い気持ちに乗せて、ルクスに尋ねた。

ルクスはちょっと間を置いて、

—もうちょっと待って—

とだけ言った。

わたしはルクスの言葉を信じて、しばらく待ってみることにした。

ルクスの言葉を信じる気になれたのは、母のおかげだ。

母がルクスの事を知らなかったとしたら、わたしはルクスを疑っていただろう。

—ゴメンね！本当に、今はまだ言えないのよ—

ルクスの念波は母にも届いていたようです。

「ルクスちゃんを責めないであげて。本当に今は言えないのよ」

母はその理由を知っているのだろう。

だけど、敢えて教えてくれないのは、本当にわたしにはまだ教えることが出来ない理由が有るのでは無いだろうか。

わたしはもうこれ以上追求するのはヤメにした。

—ゴメンね！時が来たら必ず教えるよ—

ルクスはこればかりだが、わたしは追求する気にもならず、「じゃ、待ってるね」と言うことしか出来なかった。

麦茶も3杯目ともなると、さすがに飽きてくる。

お茶菓子も、母はわたしに出すわけも無く、小腹が空いてきた。

母は柱時計を確認して、ご飯でも食べてく？と、言った。

わたしは二つ返事で頷くと、母は台所へと向かった。

「お父さんは？」

わたしは母に尋ねた。

「今日は伯父さんのところへ泊まるって」

「伯父さん？」

「佐伯の伯父さん」

佐伯の伯父さんとは、父の弟の事である。

仕事の仲間でもあるから、よくうちに相談に来たり、たまに飲んで泊まって行く事もあった。

今日は何の用事なのかな。

「幸子さんが結婚するらしいけど、できちゃった婚らしくてね」

と、超絶重要な情報を、さらりと混ぜて来るので、わたしは聞き逃すところだった。

「なに、幸子ができちゃった婚って！？」

驚きのあまり、手にした麦茶入りのコップを取り落としそうになる。

「妊娠3ヶ月だって」

「3ヶ月」

幸子というのは、わたしの従姉妹である。

向こうが3つ年下なのだが、スラリとした美人さんで、そうか、わたしよりも早くに

結婚か。

感慨深いというか。

でも不思議と、悔しいとか、負けたとか思わなかった。

わたしは結婚に対しては、漠然と、いつかはするんだろうな、くらいにしか思っていなかった。

ところが幸子は、25までに結婚とか言っていたから、有言実行と言った所か。

「幸子がね～」

「あなたはいつ頃なの？」

母の唐突な質問に、わたしは自分の唾液でむせてしまった。

宇宙人の憂鬱 26.

「わたし？」

「そうあなた」

母の笑い声が聞こえそうである。

意地の悪い！

わたしは、まだ相手が居ないよと言って、苦虫を噛みつぶした。

「フフフフフフフ」

本当に母が笑った。

わたしは心の中で毒づいて、表情は笑顔で対応した。

「ご飯まだなの」

若干語気が強めなのは、気持ちが波立っているから。

わたしはリモコンを取って、テレビをつけた。

中ぐらい大きさのテレビ。

テレビのサイズの事なんて、わたしにはわからなかったから、何型とか全然わからない。

高精細なテレビで、パソコンもつなぐ事が出来るものである。

それが、部屋の片隅に置かれていた。

有名な国産メーカーの物では無かった。

舶来もののテレビで、性能は国産よりもかなり優秀だったので、技術オタクの父が、良いものだからと購入したのだ。

この間来た時には既に有った。

ちょうどニュースをやっている時間だった。

どこかで見た光景が映っていた。

どこで見たのかな。

記憶の片隅を探ってみると、それは伯父さんの家のある町である事が思い出せた。

何かあったのかな。

画面の右端で、煙が上がる。

カメラの画像が揺れて、何人かが、煙から離れるように走り去ってゆく。

カメラマンの位置と、煙の上った建物の間には、道路があって、車と人が入り乱れていた。

もう一回、今度は大きな音とともに煙が上がり、炎が見えた。

火事？

そのうちに、消防車と救急車と、警察の車両が何台か到着する。

サイレンをミュートしての原着なので、かなり静かだったが、道路に止めるしかないようで、かなり同素の交通を乱した。

じっと見ていると、画面の中で、怪我人が担架で運び出されて、救急車の一台に乗せられる。

そうこうしているうちに、もう何台かの応援の、緊急車両が集まってくる。

次々と、怪我人が運び出されてくる。

見ているだけで⁶人は運び出されて来た。

そのうちの何人目かが救急車に乗せられた時に、見ような違和感があった。

なんとも言えないざわつきが、背中を奔って首筋に登ってきた。

なんだか父さんと、伯父さんに似ていた。

画面は小さくて、本当にそうなのか、確認できるほどハッキリと視認できなかったが、嫌な予感がした。

わたしは恐くなって、母を呼んでしまった。

母は何事かこちらに顔を出したが、ニュースの映像を見て、「ここはあの喫茶店じゃない？」と胃って視線を固定してしまった。

「何の事」

「伯父さんが新しくはじめたお店なの」

母が言った。

伯父は新規に飲食業をはじめたのだという。

その伯父の店が、火事になった建物に入っているのだとか。

わたしは驚いて、さっき見た光景と、違和感を、母に伝えた。

母は蒼い顔をして、大急ぎで台所の火気を止めてから、テレビの前に座り込んだ。

そして、少し画面を凝視していたが、思い直して、伯父の家に電話をかけた。

わたしは固唾を飲んで、母の様子を見た。

母は何度目かのコールでやっとながった電話の先にいる、叔母に向かって話しかけた。

「テレビ見てる？」

そう聞くなり、叔母は慌てた様子で、「うちの人よ」と言った。

何があったかまではわからなかったが、救急隊から連絡があって、伯父さんと父が怪我をしたのだと知らされたというのだ。

これから受け入れ病院がわかったら、連絡が来るというので、そうしたら行ってみるのだということだった。

わたしは嫌な予感がまだ続いていた。

父や伯父にもしもの事があつたらどうしようかと、本気で考え始めて、その嫌な思いを、急いで頭の中から追い出した。

そんなわけではない！

そう思い、気持ちを奮い立たせた。

宇宙人の憂鬱 27.

母が電話を置くとほぼ同時くらいに、電話の呼び出し音が鳴った。

慌てて受話器を取り、対応する母。

電話の相手は救急隊員だった。

叔母とほぼ同じ事を言われた。

つまり、病院に着いたら連絡するというものだった。

母は蒼い顔をして、受話器をそっと置いた。

わたし達は、しばらく電話機の側から離れる事が出来なくなってしまった。

母は慌てた様子も無く、まるでこうなる事がわかっていたような反応だった。

—珠世はわかるのよ。予知というか、守護霊が未来を教えてくれるの—

「未来を」

—そう。だけど、見たい未来を見る事が出来るわけじゃないのよ。彼女になにがしかの関係がある場合に、見る事が出来るの—

「そうなんだね。昔から、勤が良いんじゃないかって思っていたのよ。虐められた時も、わかっちゃったし」

—問題は、変える事の出来ない未来を見せられるって言っていた—

「意外と不便なのね」

—簡単に信じてくれるんだね、さすが珠世の子供ね—

「どう言う事？」

—普通、こういう能力って、いいように利用出来ないかって思うヤツらが出て、珠世は結構苦労して戦ってきたのよ—

わたしは、母の知られざる過去に、驚いたと同時に、母の能力というのにも興味が出てきた。

—だめよ、娘だからって、そう簡単には、力を使わせない—

「ルクス？」

—未来予知は禁断の力、そして多分、あなたにも引き継がれている—
わたしにも予知力が？

恐いな。

わたしが予知なんて手に入れたなら、絶対に何もやれなくなってしまう。

未来が決まっているなら、何をやっても同じだからだ。

だから、わたしは予知なんて興味が無い、そう言い切れれば格好いいんだけどね、
多少は、未来を知りたいかな。

—それが人間ってもの—

ルクスはわたしの心を読んだようである。

「母はどんな苦労をしたの」

ルクスに尋ねて見たが、ハッキリした答えは得られなかった。

—それは、これから体験すると思うよ。その時に、珠世は的確にアドバイスをくれる
と思う。だけど、あなたがそのアドバイスを聞ける状態であるかどうかは、わからな
い—

わたしはそういった事にならないよう注意しないといけないのだろう。

母は、若い時にどんな事を経験したのだろう。

わたしは想像してみたが、出来なかった。

わたし自身がまだ、ルクスとの冒険を経験していないのだ。

予知能力なんて持った事も無いし、想像なんて出来るわけもない。

—あなたは大丈夫よ—

—あなたは、ちゃんとやり遂げる。そのためにわたしが来た—

—あなたの母の時も、その前も、さらにその前も、ちゃんとやってのけたのよ？だから
今回も大丈夫よ。わたしを信じて—

わたしは、ルクスに突っ込みを入れたくて仕方なかった。

ルクスの何を信じろと言うのだろう。

彼女はまだ真実を隠している。

どうして隠しているのかさえ、わたしには何一つ教えてくれないのだ。

しかも母までグルになって、わたしに秘密を持っている。

何を信じれば良いのか、自信が無かった。

そんな事を考えていると、固定電話に着信があり、母が受話器を取った。

母は、手近にあったメモ帳に、病院名と病室の番号を書き留めた。

母はゆっくりと受話器を置くと、自分の車のキーを取り出し、財布の入ったバッグを
片手に、外へと急いだ。

わたしも慌てて後を追った。

宇宙人の憂鬱 28.

露天駐車で、家の脇に車が止められていた。

青系の色の小型車である。

車体の色は、母の好みの色だった。

車内には装飾品も何も無く、スッキリした車内で、よく整理されていた。

わたしは助手席の方に回り込んで、素早く乗り込んだ。

ルクスもわたしに取り憑いて、すんなりと膝の上に座る。

「母さん、わかっていたの？」

わたしは母に、疑問をぶつけた。

「何が？」

本当に何を聞かれたのかわかっていないという様子で、首を傾げる。

「知っているのよ？予知のこと」

「ああ、あれね」

母は車のスイッチを入れると、車を発進させた。

「あれはね、好きなものを見ることが出来ないのよ。見たいものを見るというような使い方が出来ないの」

わたしじゃなかったら、と言うか、悪辣な人種だったら、そんな言い訳は絶対に信じないな。

わたしはルクスが言っていたことを理解している。

母の予知は、それほど都合のいいことではなかったということだ。

予知能力はわたしにも備わっているらしい。

でも、実感もない。

その能力に利用価値を見出す人たちが、どういう手段で、それを手に入れようとするのか。

考えたって想像できない。

未来を読めたら、お金儲けに使えるのかな？

—そうじゃないよ、未来ってのは決まっていて、変える手段なんてないんだよ—
ルクスはそう言って、悲しげに微笑んだ。

「そうか。じゃあ、株で大儲けとかできそうにないんだね」

—そんなものじゃない。そのためにある能力じゃないんだよ—

「じゃあ、なんのために」

—貴方の未来には、一回だけ選択肢が与えられる。その一回を間違わないようにしな
いと—

「一回って、答えは、教えてくれないんだよね」

—残念ながら、教えることはできない—

—わたしにはわからないのよ—

—その時が来たら、多分貴方にだけわかるのよ。わたしには、その時を知ることも、

答えを知ることもし出来ないー

「ずいぶんと難しい問題なのね」

ーそうね！たぶん、世界の命運とか、そういうの？かかっているかもねー

ルクスはわざとおどけてみせた。

でも本当にそんな運命ならば、わたしには重いな。

ーあなたはやりきるよー

ーあなたの母も、その母も、成し遂げてきた。だから多分貴方も大丈夫ー

「根拠のない」

ーでも、わたしは確信しているー

「どうかな、わたしはただの、弱い人間」

ーもう！わたしがノせてあげようって気遣っているのに、本当に！ー

ルクスは頭を抱えて、それでいて顔は笑っていた。

呆れられたのかな？

ーそうではないよ、やっぱり貴方で正解だった。今回も勝たせてもらうー

「??？」

なるようになるか。

状況が、まだ理解できていないのだ。

だいたい幽霊が見えるなんて、わたしには絶対にない力だって思っていた。

それなのに、不思議な幽霊ちゃんとの出会いや、不思議な体験の数々、更には使命的なものまであるらしいのだ。

母や祖母、わたしの先祖からそういう力が有ったなんて、少しも知らされてなかったし、自分自身気付かなかった。

どうしてわたしなのかすらも理解していない。

何がなんだかわかっていないのだ。

母やルクスになんと言われようと、簡単にノセられるわけにも行かない。

ルクスは落ち着いた、安らかな眼差しで言った。

ーそれでいいー

ーあなたはそれでいいー

ーあなたのペースでいけばいいのよー

わたしは、なんのこともよくわからなかった。

ルクスはわたしの方の辺りに手を添えて、じっとどこかを見据えていた。

宇宙人の憂鬱 29.

車は、父の運び込まれた病院に到着した。

母が急ぎ足で入り口へ向かう。

わたしも後を追った。

ルクスは、フワフワとわたしたちのあとを追ってくる。

母の顔色が蒼い。

悪い予知でも見たか。

ルクスは、わたしの思考を感じ取って、思念を送ってくる。

—大丈夫よ。ただ心配なだけ。予知はないはず—

—そうか、予知って、そんなに便利じゃ無いって言ってたもんね。

わたしはそれでも安心出来なかったが、ルクスがそう言うのだから、本当に予知能力では無いのだろうな。

母は父にぞっこんだからな。

わたしは虐められていた頃、本当にこの両親だったから救われていたのだ。

両親がいなかったら。

わたしの事を見ているのが違った人だったら、多分わたしは学校へも行けなくて、引き籠もっていたかもしれない。

自殺だってあり得た。

わたしの両親は、本当にわたしの支えだった。

具体的な行動、教育委員会への訴えや、学校への抗議などもやってくれたし、でもその都度虐めが酷くなって、それでも最後まで、卒業までいけたのは、愚痴を聞いたり悩みを聞いたりしてくれた。

根本的な解決は無かったが、行動を起こしてくれると言うだけで、支えになってくれた。

それがわたしには嬉しかったし、それでも充分だった。

だから、母が困ったら、支えられる人でいたい。

そんな事を思いながらも、父のいる治療室へ着いた。

もう昼の診療は終わっていたので、患者の姿は殆ど無かった。

病院の職員や、透析治療などの患者がいるだけで、昼の喧噪とは打って変わって、静かなものである。

それでもかなりの数の人が、フロアを占めていた。

大理石のような床に、天井からのライトの光が反射して、目に優しい光が、辺りを包んでいた。

やさしい光である。

よく、病院には幽霊が出るとは言うが、ここには居そうに無いな。

—ここには、居ないわよ—

ルクスも言った。

—まあ、わたしが幽霊なんだけれど—

—と言って、プツと笑った。

—普通なら、ちょっとしたヤツならば、窓を開けて空気の入れ換えをやっただけで消えるのよ—

「じゃあ、あなたは特別なんだ」

—そうだよお〜、だから大事にしてね—

言ってみてまた笑った。

そして、顔をくもらせた。

「どうしたの」

—お父さんや伯父さんを見て見なさい—

それだけ言うと、わたしの中へ入ってきた。

看護師が、父のところへ案内してくれた。

もう父のところには医師は居らず、次の治療に移っていた。

椅子に腰掛けていた父は力なくこちらに気が付いて手を挙げた。

「お怪我は無いようですよ」

看護師の声。

わたしはルクスの目を使って、一緒に父を眺めた。

康代の母と同じように、頭のところに黒い靄のようなものがかかっていた。

—憑依されている。地獄の悪霊に—

「どうすれば良いの」

—さっきと同じ要領よ—

わたしは父に近付き、靄のところに手を翳した。

そして、思い切ってエネルギーを送り込むイメージを思い描いた。

父の体は大きくのけぞり、反応が始まった。

それに気が付いた何人かが、何事かと、視線を向けた。

わたしは構わずに、続行する。

宇宙人の憂鬱 30

ルクスはわたしに身体のを抜くように、リラックスするように指示して、さらにわたしとの同調を強めた。

—さっきよりも難敵よ—

「そうなの？」

—うん。かなり強い。あなたにコツを教えるから、協力してね—

協力しろっていても。

—大丈夫、わたしの言うとおりにして。ちゃんと指導してあげるから—

—まず、力を抜いて、楽に構えて—

ルクスが師匠モードに入ったのが、わたしにもわかった。

わたしも、気持ちを入れかえる。

—全身のエネルギーの流れがわかる？—

わたしは身体に流れるエネルギーの流れを感じる努力をしてみる。

気が、全身に満ちているのがわかる。

わたしはゆっくりと、身体に流れる気の流れを感じる。

—そうよ、感じて、そして制御する事を考えて—

—一点に、手の平に集中するイメージよ—

わたしは言われたとおりにやろうとしたが、思った通りには行かない。

まだ、本当のコツがわからない。

何度かチャレンジして、やっとコツがつかめた。

—そうよ、その調子！—

—こればかりは、体感で覚えないとね—

そんな事言ってもね！

わたしは身体のエネルギーが、手の平に集中するようにイメージする。

上手くいっているのかな？

手の平がピリピリする。

そして、熱くなる。

父の身体が、さらにのけぞる。

周りに居た、医療スタッフが、異常に気が付いて、注目する。

制止に入ろうとする者を、母が止めてくれている。

わたしは気になったが、途中でやめるわけにもいかないのだろうことは、承知していた。

手の平にためた力を、ゆっくりと、手の平から外へ放出する。

—そうその調子。あまり急にやらないでね、お父さんに負担がかかるからね—

—そう言って、ルクスはわたしに合わせて力を送り込む。

わたしも、ルクスと合わせるように、力を使ってゆく。

ゆっくりと、ゆっくりと。

父の身体が大きく飛び跳ねる。

—悪霊が、暴れているのよ—

「悪霊？」

わたしは声に出して言った。

—地獄の門の使者—

また新しい単語だ。

真相を話してくれる気になったのだろうか？

がだ、ルクスはわたしに、意識を父に向けるようにと指示してきた。

わたしは言われたとおりにする。

—もう少しよ—

と言うルクスに、気が付いた事があると、わたしは思念をおくった。

—なに？—

ルクスは言う。

ホラー映画や小説なんかだと、悪霊とお話しできたりするよね？そういった事、出来ないの？

—出来るよ。でも、今回はダメ—

—強いといっても、こいつら、低級すぎて、意思疎通できない—

—無理にやろうとすると、あなたの精神が、やられてしまうよ—

ルクスはさらりと怖ろしい事を言う。

わたしはそれ以上その事には触れなかった。

力をさらに込めると、父の身体がさらに揺れまくる。

大きく跳ねて、ベッドから落ちるかと思うほどに跳ね回る。

医療スタッフも注目している。

黒い影が、父の頭の方から、天井へ逃げ出すように伸び上がる。

さすがにこのくらいになると、勤のいい人ならば、見えるようになるらしい。

その場にいた何人かが、異変に気が付いて、声を上げて、指を指した。

—集中集中！—

ルクスのかけ声に、わたしは意識を集中した。

もうちょっと。

さらに力を送り込む。

断末魔のような音が、辺りに響き渡った。

宇宙人の憂鬱 31.

ルクスの、妙に明るい声のおかげで、わたしは平常心を保っていたのかもしれない。

黒い靄の絶叫は、まるでマンドラゴラの断末魔のように、耳障りな声を、辺りに響かせて、人々を不快にさせた。

中には耳を押さえて蹲る者や、叫び声を上げて、その場に倒れる者も居た。

病院の一室は、まるで地獄絵図のようだった。

わたしはルクスの指示に従って、まだ、黒い靄の退治をするべく、戦っていた。

この靄は、康子の母の時のようには、簡単にいかなかった。

まわりの棚の戸が開いて、備品が宙に舞い上がった。

注射器やハサミ等の刃物も宙を舞う。

当たったら怪我をするな。

わたしはそんな事を考える余裕がある自分に、少なからず驚いた。

もっと余裕が無いかと思ったが、意外と周りが良く見えている事に、少しだけ安心し

た。

宙を漂っていた刃物が、いきなりわたしに襲いかかる。

わたしは慌てて避けたので、頬の所に切り傷が付いてしまった。

乙女の顔に傷をつけるとは！

思って、恥ずかしくなる。

乙女か！

自分で突っ込みを入れたくなかったが、グッところえる。

ルクスは笑う。

—余裕だね—

わたしは自分でもおかしいと思うくらいに、落ち着いていた。

ルクスは—良い感じだよ—と言って、また笑った。

—この調子なら、案外楽かも—

修行が楽って事かな。

わたしは案外こういう世界を求めているのかもしれない。

子供の頃はいじめられっ子で、大人になってからも、人に注目される能力や、仕事面でもこれと言った特別な事はなく、平凡どころか、むしろマイナスな人生だった。

こういった特別な何かが欲しかったのかもしれない。

わたしは浮かれているのか？

—ちょっとね—

ルクスが相槌を打つ。

解るの？

—除霊中に集中しないのが、その証拠—

ルクスの厳しい言葉で、わたしは一步間違えば、自分も、命の危険が有るって事を忘れていた。

浮かれていると思われても仕方がないか。

いや、実際浮かれているのだろう。

正直言って、この状況は楽しかった。

浮かれていた！

—集中！—

まるで運動部のキャプテンか何かのようなかけ声に、わたしは吹き出しそうになりながらも、意識を黒い霧に集中させた。

霧の絶叫は、ますます酷くなり、辺りを飛び交う備品も、勢いよく壁に当たったり、人に襲いかかったりしながら飛び回っていた。

—小物霊が集まってきたのよ—

ルクスが言う。

—ポルターガイストってヤツ—

騒々しい霊！

わたしだって知っている。

これがね！

ホラー映画の世界に浸っている暇は無かった。

ハサミが刃先をこちらに向けて、ものすごい勢いで飛んできた。

わたしは大振りに避けると、ハサミは勢いよく、診療用のベッドに突き刺さった。

冷や汗が出てくるのを、止める事は出来なかった。

一気を付けてねー

ルクスは無責任に言ってくれるが、今のはマジで当たったらただ事ではなかった。

わたしは気合いを入れ直して、最後の力を振り絞ろうとしたが、その前に、相手のエネルギーが弱くなってくるのを感じる事が出来た。

絶叫も音量が弱まり、周りの人たちが動けるようになって、倒れた人たちを運び出したり、抱き起こしたりし始めた。

わたしもルクスも、やっと一安心出来た。

よく周りを見ると、壁や椅子などに、刃物や注射針が無数に刺さっていた。

ピンセットなども、壁に突き刺さっている。

怪我人はいたのか？

わたしからは確認出来なかったが、床などに血の跡はないようだった。

黒い靄は、父の体から完全に離れた。

父は白目をむいてベッドに倒れ込んだ。

靄はまだ、宙を舞って、父に取り憑こうとしている。

わたしはそれを阻止するために、力の流れをコントロールして、靄の動きを牽制した。

宇宙人の憂鬱 32

少し、余裕が出来た。

わたしは周りを見回して、怪我をした人が、どれだけになったか、気になった。

ルクスは気を抜くなと言って、わたしを叱責した。

黒い靄が、勢いよくこちらに突っ込んでくる。

わたしがかわせないので、ルクスが、気で障壁を張ってくれた。

パンと、軽く、乾いた大きな音が響いた。

わたしは驚いて怯んだが、ルクスが居てくれたので、態勢を崩さずに済んだ。

一早く慣れようー

ルクスはスパルタである。

ここへ来てようやく、母が加勢に入ってくれた。

と言うのも、もう一体の黒い靄が動き出したからだ。

それは、父から少し離れた所にいた、伯父の身体から出ていた。

母の両手の指先から、糸のようなものが、無数に出ているのが、わたしには、わかった。

母もこういった技が使えるとわかった時には、わたしは安心感とともに、今まで黙っておかれたというのがショックだった。

母はなんでわたしに黙っていたのだろう。

打ち明けてくれれば、なんとか手の打ちようもあったのだ。

まったく謎だらけに、不気味な事態である。

一珠世は、このことについて、あなたに伝える事が出来ないという決まり事、縛りがあるのよー

ルクスは、仕方がないと言った様子で、わたしの頭の中に呟いた。

わたしはどうして？と尋ねたが、まだ話す事が出来ないと言われるだけだった。

父の身体から出た靄が、再度わたしに襲いかかってくる。

わたしは再度躲して見せた。

靄の霊力は、見るからに弱まっているのがわかった。

黒い靄から感じる事が出来るパワーが、弱くなっているのだ。

ルクスも、もう少しだと言って、わたしの士気を鼓舞した。

刃物やその他の物体が、かなりもの凄い勢いで空中を飛び交い、わたしやまわりの人々や、母を襲った。

飛び交う物体は、激しく壁にぶつかったり、部屋の中の障害物に当たって床に落ちてはまた宙を飛び交い、また襲いかかってきた。

ポルターガイストは、激しく荒れ狂い、逃げ惑う人々を恐怖に陥れた。

部屋から逃げ出そうとする人が居なかったのかと言うと、そうでは無い。

逃げだそうにも、ドアをひらく事が出来なかったので、部屋の外へ逃げ出したり、助けを求める事が出来なかったのだ。

それでも何人かが、内線やスマートフォンで外部と連絡を取る事に成功した。

この部屋の様子を見に来た者や、助け出そうとする者が、部屋の外に集まりはじめていた。

外からドアを叩く者や、声をかける者が居たが、ポルターガイスト現象は、一向に治まらなかった。

母が、「しぶといわね」と、嘆息の声を上げた。

相手が協力で困っているのかと思いきや、口元にはほころびが浮かんでいた。

嘆息と感じた声調や溜息は、喜びにふるえる声だった！

珠世は黒い靄を相手に、日ごろ溜まったストレスの発散をしていたのだ。

かと言って、余裕のある戦いというわけでも無い様子だった。

わたしも母に負けないように力を放出し、父から出てきた靄の、最後の断末魔を引き出す事に成功した。

黒い霧は空中で四散し、気味の悪い叫びに似た音が、部屋の中や外に居る者達の耳を汚した。

ある者は耳を塞ぎ、床にくずおれて、ある者は立ち上がったままのたうち回った。

わたしは叫びを無視して、最後のとどめに集中した。

騒音が治まり、残す敵は伯父の身体から出てきた一体だけになった。

わたしは気合いを入れて、母の脇に近寄った。

宇宙人の憂鬱 33.

母は「久しぶりだから疲れちゃった」と、肩で息をしている。

体力的にと言うよりも、緊張して、精神的に疲れが出ているのだろう。

緊張している？

母がね。

わたしは母のこんな姿を見る事が出来るなんて、思いもしなかった。

母が、霊能師みたい。

まあ、わたしも霊能師みたいな事をやっているのだけれど。

わたしも緊張していたが、ルクスが身体に入ってサポートしているから、感覚が麻痺しているのだ。

母はわたしが脇に寄り添ってやると、安心したように、フーツと深く溜息を漏らした。

少しは安心したのかな？

ルクスはわたしに、口を貸せと言ってきた。

わたしが返事をする前に、ルクスはわたしの口を使って、母に指示を出した。

「魚子と息を合わせて、珠世！同時に攻撃して！」

わたしも、母と呼吸を合わせて、「せーの」と、母は言い、わたしは「さんはい！」と、かけ声もバラバラに、力を黒い霧の中心部に向けて放った。

狙いだけは同じ場所だった。

それ以外は…。

—…—

ルクスが頭を抱えているのが見えそうだった。

—これだけ息の合わない親子を見たのは初めてよ。魚子のばーちゃんは、もっと珠世と息が合っていたわ—

そうなの？

ルクスの言葉に、わたしは赤面しそうになりながらも、母と合わせる事を意識した。

霧が断末魔の声を上げる。

ポルターガイストも復活して、もっと激しく物体が宙を舞う。

観葉植物の鉢植えも、重たい鉢ごと持ち上がって、クルクルと舞っている。

あんなのに当たったら一溜まりも無い。

人々は、まだ宙を舞っていない机やベッドに身を隠して、バリケードにしていた。

だがそれも、終わりだった。

ポルターガイストは力を増して、机や、ベッドまでも空中に持ち上げようとしていた。

照明が、チカチカと瞬く。

それどころか、部屋の中央付近に居る、黒い靄のまわりに、雷に似た青白い閃光が、

いくつも走って、地を伝った。

—霊体が、可視化した—

ルクスがそう言ったが、黒い靄は霊体の可視化では無いのか？

わたしの疑問に、ルクスは少し黙ってから、応えてくれた。

—黒いのは、霊体本体じゃ無く、包み込む負のエネルギーみたいなものよ—

わたしの心の中には疑問符しか浮かばなかった。

ルクスの説明を聞いても、全然わからなかった。

理性的にも感覚的にも、理解できていない。

母に質問すれば、的確に応えてくれるだろうか？

そうは思えなかったので、このさなかに、母に質問するのはやめておいた。

ポルターガイストを躲しながら、靄に攻撃を集中した。

それに、母は、わたしのと同時攻撃、と言うか、エネルギーを同調させるのを諦めて、防御に徹してくれた。

母が、わたしを守ってくれている。

そう思った時に、わたしは少し安心して、さらなる力を解放できた。

—珠世ナイス—

ルクスは母の行動を絶賛した。

わたしは母に守られながら、的である黒い靄に、攻撃を集中した。

わたしの手の平から、黒い靄に向かって、白い気体に似たものが発せられて、勢いよくぶつかったかと思うと、パンと、軽い音がした。

その瞬間に、黒い靄が消し飛んで、四散した。

それと同時にポルターガイスト現象もピタリと収まった。

宙に浮いていた複数の机やベッドが大きな音を立てて床に落ちた。

さらには小物達が一斉に床に落下して、部屋の中に人たちは、それを避けるのに一苦労だった。

青白い光も消えて、照明も、瞬きをやめた。

全てが終わり、散らかった部屋を片付ける仕事が発生した。

伯父の身体は、父の時と同じように、力を無くしてくずおれた。

わたしは目視で、父と伯父の無事を確認して、母と抱き合っ、溜息を交換した。

ルクスもわたしの身体から出ていったので、もう危険は去ったのだろう。

ルクスが出て行きざまに言った言葉が、わたしの心にひっかかった。

—これでやっと始まる。覚醒した—

わたしは何の事かわからずに、ルクスに質問したが、スルーされてしまった。

本格侵攻 序章

宇宙人の憂鬱 34.

父と伯父の身体から出てきた黒い靄、それを追い払って、やっと騒動が収まったと思ったら、警察がやってきて、病院内で事情聴取だった。

わたしも1時間程度の間質問攻めに遭ったが、どう答えたら良いのかわからずに、曖昧な反応しか出来なかった。

こんな心霊現象でしたと言ってしまったら、当然私は頭のおかしい女として扱われて、午後のニュースのネタ材料となって、界隈のテレビを騒がせる存在になれたかもしれない。

いっその事スター気取りが出来るだけ、そういった行動を取れば良かったかとも思ったが、わたしはしょうしんものであるから、そのような行動は取れなかった。

テレビドラマのように、私服の警官が質問を受けてくれたのではなく、制服警官が相手だったので、多少緊張した。

わたしは本当の事を、真相を語る事が出来ないままに、ただ時間を費やしたただけだった。

母はもっと胸に入った惚けっぷりで、さすがに年季の入れ方が違っていた。

時には呆けた振りさえやってみせるから、端で見ていて吹き出しそうになるのをこらえていた。

ルクスは、他の人たちには見えない事を自覚していたから、本当に転げ回って、大爆笑していた。

わたしはルクスを尻目に、真剣な眼差しを維持しながら、警察官の質問に、答えられるかぎりの事を答えた。

そうやって、1時間後くらいに解放された訳だが、改めてみると、事件のあった部屋は、凄い有様だった。

それが、警察の調査が終わってしまうと、瞬く間に片付けられてゆく。

わたしは同じ頃に別の警察官から事情聴取されていた母が解放されるのを待って、父や伯父の連れて行かれた病室まで行った。

父と伯父は、まだ意識が戻っていなかった。

ルクスによると、取り憑いていた霊体の力が強かったので、引き離された時のショックが大きかったのだろうと言う事だった。

母は心配そうに、ベッドの脇の、備え付けの椅子に腰掛けて、それでも2人が呼吸をする胸の動きを見て、安心した様子で、溜息を漏らした。

—心配ないよ、2人は。ただ、身体にゲートが残っているから、それを塞いどかないとね—

「ゲートって」

—ゲートってのはね、人の身体に悪霊が取り憑くと、身体の回線がひらいて、追い払ってもまた次の悪霊が入って来やすくなるの—

「それがゲートなの？」

—アクセスポイントみたいな物—

—だから、侵入経路を塞ぐ事が必要なのよ—

—なんだかよくわからなかったが、別の悪霊に取り憑かれないようにするために、ゲートというのを塞ぐ必要があると言う事だろう。

わたしはルクスにやり方を聞いた。

ルクスは、それは、今のあなたにはちょっと無理だから、わたしがやっておく。

とだけ言って、方法は教えてくれなかった。

わたしの脇に居るルクスが何かをしているのがわかった。

ルクスが、ゲートを塞いでいるのだ。

彼女は集中し、伯父と父にエネルギーをおくっているようなのだ。

ルクスの集中を乱さないように、声をかけるのはやめて、彼女と、患者2人を観察する事にした。

宇宙人の憂鬱 35.

—終わった—

ルクスが、少し疲れたようすで言った。

幽霊でも疲れるのかな？

心持ち、父と伯父、2人の顔色が、ほんのりと赤みが差しているように見えた。

でも、まだ2人は目を覚まさない。

余程ショックが強かったのか、それとも、取り憑いていた霊体の力が強かったのだろうか。

わたしは病棟の中にある休憩所で、自動販売機から、母の好きな銘柄のコーヒーと、自分用には炭酸入り飲料を買った。

看護師達が、さっきの事件の噂をしていた。

聞き耳を立ててみたが、結局アレはなんだったのだろうという話にしかならなかった。

病室に戻ってみると、父と伯父が目を開き、うつろな瞳で、宙を見つめていた。

わたしは声をかけてみたが、2人からの返答は無かった。

どうなっているのかな。

目が覚めたんじゃないの？

かえって心配になった。

どうなってるのかな。

—まだ、ショックが大きいのかも—

ルクスは父親達のまわりを、クルクルと回りながら、何かを調べている様子だった。

何を調べているのかは、わたしにはわからなかったが、父達の容態についての重要な何かだろうことは、わたしにもわかった。

母はと言うと、父が取りあえず起き上がって、行動を取ってくれた事に感謝し、驚いた。

父は本調子とは言い難かったが、それでも母は、安心したのだろう。

ベットの上に崩れ立った時には、もう窓から見える太陽が、違った色合いに見えるようになった。

夕暮れ時、眼の焦点も定まらずにいる2人の男に、わたしと母はこのまま治らないのじゃ無いかと、不安の色を隠しきれなかった。

しばらく時間がかかりそうだ。

わたしは、母とともにもう少し看病をすることにした。

このまま帰ってしまおうかとも思ったのだが、看護師に任せきりというのも気が退けたので、帰る事はしなかった。

わたしは母に、買って来た缶コーヒーを手渡した。

もうとっくにぬるくなってしまい、せっかく冷えた缶コーヒーだったのだが、飲み頃を逸してしまった。

わたしは母と、缶飲料を飲みながら、やっと人いきついた心持ちになった。

—霊界からの侵攻が、早くなっているのかもしれないね—

ルクスはさらりと怖ろしい事を言った。

わたしは、いまだに制服から着替えていない事に気が付いた。

改めて自分の服装を見直し、早く着替えたかった。

母はルクスを探しているようだった。

理由はわからなかったが、幽霊美少女に、何か尋ねたい事が有ったようである。

クルクルと、辺りを見回して、ルクスの姿を探し求めた。

わたしは、どうしたのかと母に尋ねたが、母は何も答えずに、ルクスが出てきてくれないかと、ただ待っていた。

宇宙人の憂鬱 36.

父は意識がハッキリしてきた様子で、しっかりとした目つきで、母とわたしを見比べた。

母は安心したのだろうか、今にも撫で回しそうな雰囲気、父を見つめている。父は病院の寝間着に着替えさせられていて、その服が妙に似合っていたために、母はとても愛おしそうに眺めた。

わたしはそんな母を可愛らしく感じた。

伯父の方はと言うと、こちらはもうベッドから這い出して、自宅に帰ろうと、交渉を開始していた。

大して検査らしい事もしていなかった。

だから、検査をしてからと言う事を言われていたが、そんなの待ってられない、すぐ帰りたいと、伯父は訴えていた。

対応していた看護師も、根負けして、他に裁可を仰いでいた。

結局検査だけして、結果は後日診察を受けると言う事になり、その場は収まった。

父もそれに乗かって、伯父とともに検査を受けた。

叔母もやってきて、わたし達は揃って帰る事にした。

叔母も急いで出てきたらしく、いつも洒落た格好をしているのに、今日に限っては、あまりかっこの良いスタイルでは無かった。

彼女にしては珍しく、ジャージ姿だった。

仕事をやっていた、と言う様子では無く、おそらくランニングか何かのトレーニング中だったのだろう。

叔母も自分の車で来ていたから、わたし達は別々に病院を出たが、せっかくなので、市内の食堂で食事をしていこうという事になった。

父と伯父の共通の知り合いが経営している、町の中華屋さんである。

ここはわたしが子供の頃からよく連れてきてもらっているお店である。

店構えももうだいぶくたびれた感じに見えたが、当分改装する気も無いのだろう。

父と伯父の知り合いである店主は、今日は居なかったが、恰幅の言い主人で、確か息子が後を継ぐべく、料理修業に入っているはずだが、もう長い間この店には来ていなかったの、息子さんは料理を任されるようになっていたようだ。

店主によく似た人が、奥で鍋を振るっていた。

この店は、町の中華屋に良くある、チャーハンと餃子が自慢のお店だった。

その他にも、盛がよく、若い学生や、サラリーマンにも人気のお店だった。

昼時や、夕飯時には行列の出来るお店でもある。

だけれども、わたしは天津飯が大好きで、今回もそれを頼んだ。

会食時の話題は、今回の事件の事だった。

当然ながら、父や伯父、叔母は、ルクスの事は知らないし、心霊現象などとは無縁の人たちだったので、その事はもし話しても、信じてもらえとは思えなかった。

ルクスも、真実は話さないようにした方が良く、アドバイスをくれた。

母もその事には同意だった。

だから、わたしも、どうしてあんな事件が起きたのかわからないと言った体裁を繕って見せた。

だが、父はどうやら薄々気づいていたようで、ハッキリしない意識の中で、わたしの戦う姿を見ていたような事を呟いて、わたしをドキリとさせた。

ルクスは家族の団らんに水を差すつもりは無かったのだろうが、少し気になる事を呟いた。

—いよいよ、本格侵攻が始まってしまったか—

わたしはどう言う意味か聞きただしたが、ルクスは黙ったまま答えてくれなかった。

宇宙人の憂鬱 37

食事が終わって、しばらく5人で話していたが、店が混み始めて、少し狭く感じられるようになってきたので、会計を済ませて、店を出る事にした。

店の主人はどうとう帰ってこなかったが、息子さんの腕を確かめられたので、それで満足しておこう。またいつ来られるかわからないが、いつかまた来たいなと思いながら、わたしは、店を後にした。

叔母と叔父は、もう家に帰って、ゆっくりしたいと言ったので、お店の駐車場で別れた。

父と母、そしてわたしは、自分たちの車で、家路についた。

わたしは途中でコンビニに寄ってもらい、おやつと飲み物を購入し、代金が600円足りなかったので、母に立て替えてもらった。

わたしはコンビニでの買い物を終わると、もう一度、ルクスに聞いてみた。

—さっきのは、どういう意味だったの？—

ルクスは答え辛そうに、それでもわたしに、語ってくれた。

—地獄の門はもう開いているの。そこから悪霊達が、この世界にやってくる—

—その数は計り知れない。それを防ぐのは、あなたよ—

—そして、あなたの他に、まだ仲間が居るのだけれど、その連中と、力を合わせて戦わなければならないの—

わたしは、仲間というのを詳しく尋ねて見た。

—仲間というのは、当然志を同じくする同士よ—

—でも同士には、裏切り者も出てくる。気を付けないと—

裏切り者って？

—悪霊の側に着く人たちよ—

—こいつらは、悪霊よりもたちが悪い—

わたしは、大きく頷いた。

何となく理解できる。

人を虐めるような連中だ。

わたしは大いに共感した。

だがしかし、ルクスはそれについては、顔をしかめただけで、これと言って言及しなかった。

わたしはルクスを尻目に、レジ袋から、缶コーヒーを取り出して、口にした。

一人間達の裏切り者は、大概、悪魔崇拝者。悪魔教—
そんな人、本当に居るんだ。

わたしは少々驚いていた。

虐めのとこをやる人間がいるのは、実感でもわかる。

だが、宗教の事は、正直よくわからなかった。

悪魔のような人間の集まりなのか？

—そうでは無いわ。居たって普通の人間。でも、内心は、邪悪な存在—

ルクスが説明してくれたが、まだよく理解できていなかった。

ごくごく普通の人間が、ある日突然性格が変わって、いじめっ子になってしまうようなものか？

そういうことは、経験から行っても、良くある。

わたしは自分なりに納得する。

ルクスはちょっと違う気がすると言ったが、それ以上なにも言わなかった。

そんな問答を繰り返しているうちに、家に着いてしまった。

母は父を気遣って、車を玄関前に止めると、肩を貸して玄関の方へ歩いて行った。

わたしは素早く母から、玄関の鍵を受け取ると、ドアに差し込んで、鍵を開けた。

ついでにドアを開けてやって、母と父の事を中に入れてやると、今度はわたしが父の肩を抱いて、寝室まで連れて行った。

母は車のところに戻ると、車を動かして、定位置に置いた。

そして家に入り、ドアの施錠をして、冷蔵庫の麦茶を飲んだ。

宇宙人の憂鬱 38.

今晚はとまっていく事にした。

終電も間に合わなかったし、父の事も気になった。

翌日は遅刻の電話でもして、早朝の電車に乗れば良いかなと、そんな都合の良い事を考えていた。

早朝6時46分の電車に乗る予定でいたから、会社に電話連絡を入れるのは、そのかなり後と言う事になる。

少なくとも、8時をまわらないと、誰も出社してこないからだ。

わたしは、久しぶりに自分の部屋で眠る事にした。

幸いにも、ルクスはなにも話しかけてこなかったし、朝から大変な事ばかりだったの

で、体力的にも限界点を向かえていた。

わたしは部屋の床に敷いた布団の中で、そっと目を閉じた。

室内の電灯は、リモコンで操作可能だったので、手元でスイッチを操作した。

疲れているので、すぐに眠る事が出来るかと思っていたら、頭脳が興奮状態にでもなっていたのだろうか、冴え渡っていると言うのとは違ったようで、頭痛がして、気持ちの悪い、まるで二日酔いのような気持ちの悪い状態で、覚醒した状態だった。

わたしはそのような気持ちの悪い状態で、一向に眠る事が出来なかった。

眠れない状態が続くようならば、会社を休んでしまおうかと、怠け者のわたしは考えはじめていた。

しかし、眠れないのがこんなに辛いのだと、久しぶりに体感できた。

眠れるまでの間、考え事をしていようか。

先ず、脳裏に浮かんだのは、なぜわたしだったのか、と言う事だった。

悪霊達と戦う宿命の一族なのか？

もし、そういったものだったら、覚悟と言ったものが必要なのだから、事前に説明があっても良かっただろう。

ルクスは突然現れて、母もずっと前から知っていたのに、何も教えてくれなかった。

それどころか今も秘密主義である。

そのところが引っ掛かって、心のどこかにわだかまりを感じていた。

なにか、のみ込めないものが、喉に引っ掛かっているような、そんな感覚だった。

それと、母達の事は置いておいても、敵の悪霊の事である。

今日は、2件の事件と、3体の悪霊を倒した。

そして、わたしにとっての初めての除霊は、全てルクスが体内にしてくれた事によって、力を発動できた。

ひょっとしたら、主役はわたしじゃなくて、ルクスの方なんじゃ無いかと思った。

わたしはルクスにとっては、ただの電池パックで、エネルギーパックなのでは無いかと言う事を考えると、なんだかシックリくる。

ルクスはどう答えるかな。

気になって仕方がなかった。

わたしはその考えに到った時に、なんだか少しだけ、気持ちが楽になった。

それにしても、悪霊って、なんなのだろう。

彼らが侵攻をする理由が、ルクスの口からも、母の口からも、悪霊自信からも語られていない。

本当にどういった理由なのか、わたしの戦う意味や、存在理由はなんなのか。

もっともっと情報が必要だった。

でもまあ、気分が楽になった分、頭脳の興奮状態が取れた様子で、ゆっくりと、睡眠の時間が訪れた。

わたしは電車の時間の、1時間前に目が覚めるまで、ゆっくり眠る事が出来た。

宇宙人の憂鬱 39.

会社へ電話を入れたのは、9時をまわってからだった。

幸い電話口にて、対応してくれたのは、#長屋匡子--ながやきょうこ--#さんだったので、苦し紛れの言い分けも出来た。

昨日の事件の事は話したが、それならば、間に合うように帰宅する事も出来たのではないかとと言われて、乙女の言い訳としては少し恥ずかしいが、咄嗟に脳裏に浮かんだ言葉が、スッと出てしまったので、赤面しながらの電話対応であった。

どんな言い訳かというと、遅刻欠席の定番中の定番である、下痢による腹痛！

なんでこんな言い訳が出てきたのか、寄りによって、下痢理由とか、考えられない！
我ながら恥ずかしい。

まあ、わたしは真面目なので、サボった言い訳なんて考えた事もないし！などと言っても仕方がない。

言葉にしてでてしまったのだから、もう取り返しが付かない。

失言だね！

ルクスの笑い声が、脳内を駆け巡る。

この子、幽霊なのに、陽光のもとでも平気なようで、フワフワと漂いながら、わたしについてくる。

本当に不思議な子だ。

もっとも、わたしが幽霊の事を知らないだけなのかもしれないが。

駅から出て、1キロほどで会社までついてしまう。

だから、バスで行くのも、ちょうどよいバス停もないし、タクシーだと勿体ない距離である。

したがって、歩くしかない。

10分もかからないかな？

歩道を歩いていると、弁当屋が、もう弁当を陳列していた。

朝飯には遅いし、多分昼食の弁当だろう。

ここの弁当屋さんは、特製とんかつ弁当がもの凄く人気で、わたしは今の会社に勤め始めてから、一度も購入出来た事がない。

ふと、ショーケースを見ると、幻の特製とんかつ弁当がならんでいるでは有りませんか！

でもここで、弁当を購入していけば、お前遅刻して、何やってんだと言われそうなので、目をそらす。

ここのは味噌ダレで、すごく美味しいらしい！

わたしは煩惱を振り払うべく、歩く速度をアップさせた。
少し歩くと、会社の入っている雑居ビルが視界にあらわれる。
小さな5階建てで、最上階が、オーナーの居住区になっていた。
オーナーの誘いで、屋上に上がらせてもらった事があるが、何と、綺麗な菜園になっていた。
土は、生ゴミの再使用で、立派な腐葉土が出来らしい。
ビルの1階は、コンビニエンスストアが入っていた。
大手のチェーン店ではなく、地域の会社が運営する、地域色豊かなお店だった。
もちろん弁当もある。
ここのは、ハンバーグ弁当がオススメだ。
2階は喫茶店で、夜はバーに変身するお店である。
3階と4階は、わたしの勤める会社。
3階部分が制作部門で、4階が営業部門というか事務所。
わたしの会社は、アニメを手がける会社だが、あまり大きいところではない。
まあ、下請的なアレです。
だからどうって事も無いし、今の会社は凄く好きなので、そういったことは一向に気になりません。
4階までの階段を、軽快なステップで駆け上がり、と言いたいところだけど、息を切らしながら、やっとの思いで登り切り、事務所のドアを開けた。
今日はめずらしく、全員が揃っていた。
#中川 恭子--なかがわ きょうこ--#、#山下 五郎--やました ごろう--#、#新美 さとみ--にいみ さとみ--#、#梓川 利美--あずさがわ りみ--#、そして#長屋 匡子--ながや きょうこ--#が迎えてくれた。
中川さんは女社長である。
五郎さんは、営業担当で、後は基本、事務けん任の営業スタッフである。
わたしは肩で息をしながら、挨拶もそこそこに、自分の席へ着いた。

宇宙人の憂鬱 40.

「魚子、一緒にお昼に行かない？」
長屋匡子さんが、わたしを誘ってきた。
わたしは、朝買いそこねた特性とんかつ弁当が気になっていたが、どうせ売り切れだろうから、長屋さんの誘いに乗ることにした。
長屋さんは、この近くの定食屋さんによく行く。
長屋さんの常連であるお店は、いわゆる街の洋食屋さんである。
カツカレーが美味しいのよって、ちょっと女子にはどうかと思うメニューをすすめて

いたっけ。

でもわたしも、カツカレーはわたしも大好きだけれどね。

—わたしも大好きよ—

ルクスが言った。

???食べたいのかな?いいよ、わたしの中に入れば?

—いいの?—

ルクスの喜びようと言ったらなかった。

人体に憑依すれば、味がわかるとか?

—まあね—

彼女は嬉しそうに笑った。

初めて見せた、その可愛らしい笑顔が印象的だった。

わたしは仕事のきりが良いところで作業を止めた。

長屋さんは隣で大きく欠伸をしながら、わたしを待っていた。

「すみません、おまたせしました」

「いいのよ、2分位だし」

わたし達は、会社を出た。

定食屋の名前は「さくらや」だった。

ありそうでいて、なかなか見かけない定食屋の名前だった。

外観はどうかと言うと、オシャレ女子が入りたがらないような、少し年代感のあるお店だった。

「味は絶品よ」

長屋さんは言った。

—期待大だね!—

ルクスも大いに期待している様子である。

ドアを開け、中へ入ると、昼時だと言うのに、客が一人も居なかった。

これは、大丈夫なのかな?

「いつもはもっと客が居るんだけども」

長屋が言った。

客どころか、店員も居ない。

年季の入った店内を見回す。

長屋は声を出して、店長を呼んだ。

—なにかおかしい—

ルクスは言って、わたしの体に入ってきた。

ルクスが憑依すると、わたしにも、おかしな雰囲気を感じるようになった。

店の厨房の奥の方から、何かが伝わってきた。

何か居ると言うよりも、何かがある、と言う感じだろうか。

わたしは長屋さんが危険なのではないかと思い、ルクスに彼女のホローをお願いした。ルクスは承知してくれた。

わたしは長屋さんにここに居てくれるように言うと、厨房の奥が気になったので、そこへ向かった。

厨房は、綺麗に整理されていた。

さすが、プロの仕事場という感じである。

厨房の奥には様々な道具があったが、気になったのは、ひときわ存在感のある大きな業務用の冷蔵庫である。

その冷蔵庫の辺りの空気が、黒く見えたのだ。

これは昨日の宮とは違う気がしたが、まったく異質なものではないように感じられた。

冷蔵庫に近づき、思い切ってドアを開けてみた。

そしてわたしは、驚愕した。

様々な食材とともに、年老いた男女が、抱き合うようにして亡くなっていた。

2人の周りから、黒い靄が立ち込めていた。

—よくない、清める—

ルクスは言って、浄化を始めた。

わたしの体から、白い靄が出てきて、黒いのを包み込んだ。

これがルクスの浄化なのだろう。

終わってから、近くに来て死体を見て驚いている長屋に、警察を呼ぶように頼んだ。

浄化したあとは、わたしは肩で息をするほどに疲れてしまった。

ルクスはわたしから離れると、辺りを警戒している様子である。

宇宙人の憂鬱 41.

—いるかも—

ルクスはわたしの頭の中に直接語りかけてきた。

—いるって何が？—

わたしは何となくわかっている返事を、効きたくないとは思いながら、それでも一応質問してみた。

—もちろんアレよ—

ルクスは少し苛ついた様子である。

幽霊でも苛つくのか。

わたしは感心と驚きを隠さないで顔に出した。

辺りを見回したが、何も無いように見える。

物陰も注意深く意識を向ける。

また病院のようなポルターガイストが襲ってきたら、刃物の多い厨房のようなところ

では、狭いし避けきれなくて、怪我は必至だなと思った。
警察を呼んだのだから、何かあっても安心と思うほどに、わたしは楽観的では無かった。
そして、その予感が当たった。
冷蔵庫の死体に、黒い霧が集中して吸い込まれた。
そして、死体が少しずつ動き始めた。
腕が動いて、冷蔵庫内の食材の入った段ボールをつかみ、むくりと立ち上がった。
わたしは不思議な事に、大して驚かなかつたし、恐怖心も無かった。
ルクスのおかげなのだろうか？
それはわからなかった。
死体は冷気と、死後の時間経過で、青白くなっていたし、おそらく死後硬直をはじめていたのだろう、少し硬い動きだった。
映画のゾンビそのものだった。
黒い霧や靄は、ひよっとしたら霊体と呼ばれるものなのだろうか。
夫婦の死体は、絡み合ったまま立ち上がると、ゆっくりと冷蔵庫を出ようとした。
わたしは素早く、冷蔵庫のドアを閉めたが、ゾンビに効くのかどうかすらわからなかった。
業務用冷蔵庫の、重いドアを閉めて、フックをかける。
中からドアを叩くような音が聞こえてくる。
おそらくドアを叩いているのでは無くて、死体が移動しようとしてぶつかって居るのでは無いかと思う。
わたしは耳を塞ぎたくなるような音を聞いても、恐怖心は湧かなかつたが、長屋匡子先輩は違っていた。
様子を見た長屋さんの顔は、恐怖に引きつっていた。
手にしたスマホが、わなわなと震えていた。
わたしは長屋さんの頭に、手の平をのせると、念を込めた。
どうしてそうしたのか、わたしにもわからなかったが、そうする事で、長屋さんの正気が保てる気がしたのだ。
現に長屋さんは気持ちを落ち着かせて、正気に戻った。
これはルクスの力なのか、わたしに隠された力なのかわからなかったが、長屋さんは恐怖心を克服して、下がって身を隠す事が出来た。
「警察が来るまで、そこを動かないでください」
わたしが長屋さんに指示を出すと、長屋さんは頷いて、それでもわたしと冷蔵庫のドアを交互に見比べていた。
完全に恐怖心が無くなったわけでは無いようだ。
手がざしの力は完璧では無いのだと行く事が、よくわかった。

長屋さんの心は、いまだに恐怖に支配されていた。
ただほんの少しだけ、正気が戻っただけであった。
周囲に目を配って、警戒を怠らないのは、ひじょうに疲れる。
パトカーのサイレンが聞こえた時には、ホッと溜息が漏れた。
わたしも、思わず膝をついてしまいそうになるのを堪えるのが大変だった。

宇宙人の憂鬱 42.

警察官が2人入って来た。
冷蔵庫の動く死体は、まだ、暴れていた。
「この中に、暴漢がいるのかね？」
歳をとった警官が、わたしと#長屋匡子--ながやきょうこ--#は、何をどう説明すればよいのかわからなかつた。
「冷蔵庫の中じゃ、死んでしまいませんか？」
若い警官が、先輩に提言する。
「そうだな、開けてやるか」
わたしは嫌な予感がしたが、警官達を止める事が出来なかつた。
予感というか、確実に成る現実。
ゾンビ化した店主の遺体が襲ってくる、そんな事を言ったとしても、決して信じてくれないだろう事は、わかりきっていた。
長屋先輩も恐れているようだ。
アレを見てしまったら、誰もが恐怖するだろう。
それとも、あまりの事にパニックを起こして、物事が判断で見ないほどになってしまうか、どちらにしても、あまりよくない事だった。
警官はどう反応してくれるか。
若いのは、それでも拳銃を構えて、暴漢の行動に備えた。
年老いた警官は、声をかけながら、そろりとドアを開ける。
わたしと長屋先輩は、その様子を、抱き合いながら眺めている。
わたしは別に、抱き合わなくても良かったのだけれど、先輩が抱きついてきたので、されるがままにされていた。
冷蔵庫のドアが、重々しく開かれた時に、老警官の首が、跳ね飛ばされた。
胴体から血しぶきが飛び上げ、ゴロリと頭が床に転がり落ちた。
噴水のように血が飛び散り、床に血だまりを作った。
その様子を見た、若い警官は、パニックになって、拳銃を連射した。
そして、弾を撃ちつきしてしまって、それでも引き金を引き続けている。
長屋先輩は、パニック状態で、叫びを上げて、店の外へ逃げて行ってしまった。
わたしはと言うと、ルクスの影響だろうか、妙に落ち着いて、心臓も、呼吸も、乱れ

はなかった。

こんなに自分が豪胆だとは思わなかった。

血の海を前にして、落ち着いた気分でいられた。

これはきっと、自分の親族が死んで、涙をも流さないと言った程度の事ではないのだろう。

目の前の死の衝撃が、ルクスカ、もしくは自分自身の精神力の力で長\得られている感覚。

だが、決して、死への恐怖がないのではなくて、恐れはあるが、覚悟を決めていると言った感じだろうか。

実は、自分自身でも落ち着いた感覚が、今この時、わたしの精神を支配していた。

ゆっくりと、動く死体、ゾンビが2体、冷蔵庫のドアを通して、外に現れた。

青白い体だったが、外傷もなかったので、まるで生きているような錯覚さえも与える、見た目の綺麗なゾンビだった。

映画とはまるで違うな。

わたしは本当に落ち着いていた。

虐められた経験からか、今すぐに殺されるというような感覚がなかったためか、本当に肝が据わっていた。

若い警官は、銃を前弾撃ち尽くしてしまってから、腰が抜けたように、その場から、動けなくなってしまっていた。

わたしはゾンビを睨み据えながら、警官を引っ張って、後ろにさげて、かろうじて正気を保っていた長屋匡子に託すと、店を出るように指示した。

長屋はわたしの事など気にせず、急いで店を後にした。

若手警官も、逃げ出した。

わたしは一人、ゾンビと対峙しながら、相手を観察した。

ゾンビは、動き自体は普通の人間くらいの物だった。

ジョージ・A・ロメロのゾンビのように、のろのろした動きではなかった。

外見に傷らしい物はなかった事もあり、実に人間らしく見えた。

カクカクとした動きも無く、本当に、なめらかな動きだった。

わたしはゆっくりと、ゾンビの前進とともに後ずさって見せた。

宇宙人の憂鬱 43.

わたしはゾンビの目を観察した。

ゾンビは眼球を動かさなかったから、目で見て目標を攻撃するようなものではないようだ。

わたしはゾンビが何を目標に移動しているのか、確認したかった。

おそらく何も目標など無いのかもしれない。
わたしはゆっくりと後ずさりながら、手の届く位置にあったお玉を放り投げてみた。
大きなスプーン、お玉は、ゾンビの後ろに飛んでいった。
狙って投げた方角よりも、少しズレてしまった。
あわよくば、ゾンビの行動を阻害できると思い、ゾンビの右側に向かって投げたつもりが、手元が狂って真後ろに行ってしまった。
業務用の冷蔵庫に当たって、カランと音を立ててから、床に落ちた。
床でも跳ねて、音が鳴った。
ゾンビの動きが一瞬止まって、方向転換した。
音で判断している？
2体のゾンビがお玉に興味を示しているすきに、わたしは距離をとって、出来るだけ音を立てないように、店の玄関へと急いだ。
足をひっかけて、大きな音を立ててつまずいてしまった。
ゾンビの注意がこちらに向いた。
やはり音で狙いを定めているようである。
ルクスがわたしとのシンクロを強めてきた。
わたしの身体がほんの一瞬、白く輝いた。
自分自身驚いていると、ルクスの声が、頭に響いた。
—この死体、今はあんなだけれど、もう少し時間が経つと、頭が良くなるし、動きも良くなる。ここで倒しておかないと—
倒すっていてもどうやって？
—弱点はある。先ず一つ。死体を焼く事。それともう一つ。塩を口にすり込んで。そうすれば、取り憑いた悪霊が逃げ出すはず—
簡単に言ってくれる。
その他に注意点は？
例えば噛まれるとゾンビになるとか。
—その心配はないわよ—
ルクスの返事に、わたしは少しだけ安心した。
—ゾンビにはならないけれど、死んでしまう。そして、魂は地獄へ持っていかれるのよ—
わたしの安心を返せ！と叫んでも詮無き事。
噛まれるとそうなるの？
どうやって口に塩をすり込むのよ。
—死体を燃やすってのは、考えないの？ここはガスもあるし—
ルクスって、悪霊なんじゃ無いかって、時々思う。
それは無いわ。

それをやったら、火事になってしまうじゃない。

ダメだよ。

火事はダメ。

—そう言うと思った。あなたが店ごと吹き飛ばそうって言う人間だったら、わたしは教えなかったけれどね—

ゾンビの動きがまだゆるいうちに、手近にあったフライパンや鍋を投げて音でゾンビを誘導しながら、わたしは塩を探した。

中華料理店だから、塩など必ずどこかにあるはずだ。

調理台の引き戸や、戸棚を探してゆくと、そこまでしなくても良い位置に塩の入った袋が置いてある事がわかった。

調理をしているときに取りやすい所に置かれていた。

わたしは素早く塩入の袋を取った。

これをどうやってゾンビの口の中に放り込むか。

しかも2体いるのだから、考えないと。

頭をフル回転させても、わたしのセンスでは、妙案が浮かばなかった。

宇宙人の憂鬱 44.

「塩は何かに入っているても良いのかな？」

わたしはルクスに尋ねた。

ルクスは少し考えてから、—たぶん—と言った。

わたしはポケットからハンカチを取り出した。

その中に、塩を入れて、固く縛る。

これで、塩入のテルテル坊主が出来上がった。

それを、厨房の脇にあったデッキブラシの柄の先にくくりつけて、迫り来るゾンビに向けた。

まずは、店主らしき男のゾンビに狙いを付けた。

口が少し開いたのを狙って、一気に突き入れた。

だが、突きは決まったが、口には入らずに、デッキブラシの柄が前歯に当たって、ゴツンと音を立てた。

そして、ゾンビが勢いよく後ろに倒れた。

調理台と、冷蔵庫の間の床に倒れ込んだ。

起き上がろうともがくが、なかなか上手く起き上がれない様子で、奇妙な音を立てて、ゾンビが鳴いた。

わたしはもう一体の女性のゾンビにも、同じ事をしたが、今度はなかなか上手く突き飛ばす事が出来なかった。

ゾンビはあざ笑うかのように、また、奇妙な音を立てた。

噛まれると、ゾンビになるとかそんな生やさしいものではないと聞いて、それでも怯まなかったのはなぜだろう？

わたしには、仲間を守るとか、そういった意識が薄い。

それなのに、なぜ、ゾンビなどに立ち向かう？

1度は人類なんて滅んでしまえば良いとも思っていたのに？

わたしにも、それなりに守りたい事が出来たのだろう。

会社の友達や、父や、母や、そういった人が、わたしに力を与えてくれている気がする。

わたしは手の届くところにあった、まな板を、女性のゾンビに向かって投げつけた。

相手が怯んだ隙を狙って、もう一度、デッキブラシの柄をたたき込んでやった。

今度は効いてくれた！

相手がよろけてくれた。

すかさず2撃3撃と、たたき込んでゆく。

相手が鈍いので、面白いように決まる。

日ごろ走っていて良かった。

体力はまだある。

最初に倒したゾンビも、まだ起つ事が出来ない。

その上に、わたしの攻撃で、もう一体のゾンビが倒れ込む。

その一体が重石になって、二体が絡み合って、起き上がる事が出来ない。

わたしは調理台の上のフキンを取り、やはりその中に塩を詰めて縛った。

ゾンビに近付いて、先ず一体。

上にのっている女のゾンビの口に、デッキブラシの柄の先についた塩入ハンカチを突っ込んだ。

抵抗はあったが、口を無理矢理こじ開けて、力任せに突っ込んだ。

ハンカチは喉の奥に入った。

わたしはゾンビの歯を利用して、ハンカチをひっかけて、デッキブラシの柄から外した。

直接塩を入れたわけではないから、効果はまだ現れなかった。

だが、塩の浄化効果なのか？

ゆったりとゾンビの動きがゆるくなって行く。

効いているのか？わたしは疑いながらももう一つの塩の入った布を、デッキブラシの柄にくくりつけて、下に寝そべる店主と思われる男のゾンビの口に、思い切り突っ込んだ。

喉の奥まで入れてから、苦労して外し、しばらく様子を見た。

やはり動かなくなってしまったが、死体が消えるとか、黒い煙が出てくるとか、そういった変化はなかった。

ゾンビ2体は、動かなくなっただけだった。

本当に解決したのかはわからなかったが、わたしはその場に座り込んで、安堵の息を漏らした。

若い警官が戻ってきたが、彼は事態がのみ込めずにいた。

宇宙人の憂鬱 45.

今回は、上手く逃げるわけには行かなかった。

わたしは、店の外で待っていた長屋匡子と合流した。

長屋はまだ怯えていた。

それでもわたしを心配してくれて、わたしの方を抱きしめてくれた。

わたしも先輩を抱きしめて、二人は抱き合った。

無事を喜び合った。

それを終わらせたのは、老警官だった。

事情聴取、と言うか、自体の説明を求められたが、こんな事件を上手く説明できるわけも無いし、説明してもわからないだろう。

まあ、わたし自身もよくわかっていなかった。

事態がのみ込めなかったと言うのでは無い。

こういった事件そのものが、まだわたしには理解の範疇には無かった。

ルクスや今まで起こった事件を理解しようとしていたが、理解が追いつかなかった。

今までは、きっと、理解しようとしていただけかもしれない。

わたしは、起きた事を出来るだけ克明に説明したが、不審な点は残っただろう。

警官も納得いっていなかったと思う。

しかし、これ以上わたしから何も得られないと思ったのだろう、追求は無かった。

30分くらいで解放されたが、住所と勤務先は聞かれた。

まあ当然かなと、妙に納得した。

事情聴取の間に、ゾンビだった死体は運び出されていった。

もう動く事は無いだろうとは思うが、動き出したとしても、わたしの管轄から離れたのだから、対処のしようも無いのだけれど。

わたしは冷めた感覚で、死体の運ばれる様をに届けた。

本当に落ち着いている自分に、驚いていた。

「お昼、終わっちゃったね」

長屋先輩の声に、我に返って、そう言えば、自分がまだ何も食べていない事実を思い出し、グウグウと鳴く胃腸の音を抑えきれない乙女な私は、赤面してしまった。

「コンビニで、おにぎりでも買う？」

長屋先輩も落ち着いたようで、わたしの事を気遣ってくれた。

わたしは長屋先輩と、コンビニでおにぎりを買って、会社に戻った。

もうみんな帰って来ていた。
そして、わたし達は上司に説明を強いられた。
その様子を見て、ルクスはクスクスと笑い転げた。
本当はこの子は悪霊なんじゃないかなと思う。
わたしはイラッとして、ルクスを見据えた。
ルクスは可愛らしく笑って診せたが、わたしは許してやる気持ちにはなれなかった。
ルクスはふてくされたが、こんな幽霊なんて、今までのイメージには無かったな。
5時になった。
今日は定時で退社予定。
長屋先輩も、わたしに付き合っ、定時退社した。
ひょっとしてゾンビの事を聞きたいのかなと思ったが、やはりそうだった。
わたしは長屋先輩に説明しても良いかどうか、ルクスに聞いた。
ルクスは良いよと気軽に言ったが、あまり深入りはさせないでよと、注意してきた。
わたしは長屋先輩に、今までの事を語る事にして、そのために先輩を部屋に招いた。

宇宙人の憂鬱 46.

わたしは長屋先輩と、自分の部屋で、缶ビールで乾杯をしていた。
つまみは自分で作って、と、言いたかったが、途中のコンビニで、ビールと一緒に、乾き物やサラミなどを購入した。
ついでに晩ご飯も、コンビニで購入した。
出費だな、と、少し反省したが、先輩と家飲みなんて初めての事だから、それでも良いかなと思えた。
こんな事件がなかったら、おそらく長屋先輩だって、わたしの家には来てくれなかっただろうなと、想像できた。
わたしはお酒を飲みながら、ルクスと出会ってからの、全ての出来事を、先輩に話した。
先輩はじっと聞いていたが、おそらくこんな事は、あのゾンビ達を見ていなければ、信じられなかったろうと言って、蒼い顔をしてふるえた。
長屋先輩は、ルクスの存在が、自分にも見えたら良いのにと言った。
そうすればお話しが出来るのにねと言ってくれた。
ルクスはわたしに、その覚悟があるんだったら、声くらいなら聞かせてあげられるよ、と言った。
わたしはその事を先輩に伝えると、先輩は是非にも聞いてみたいと、わたしに言ったので、ルクスが先輩の頭の中へ、メッセージを送ってあげた。
長屋先輩は初めのうちは驚いて、耳を押さえたが、次第に慣れてきて、コツをつかんだのか、ルクスと話が出来るまでになった。

ルクスも新しい友達が出来たと、喜んでくれた。

わたしも、相談が出来る相手が、身近に出来た事を喜んだ。

「悪霊の軍団が攻めてくるんだっけ？ いったいどうなって行くの？ これから」

長屋先輩が、ルクスにともわたしにとも、どちらにともなく質問した。

ルクスが答えるべきか悩んでいるのが、なんとなく、わたしにもわかったから、ルクスに任せる事にした。

それに、わたしもその事について聞いてみたかったのだ。

しばらく時間があって、ルクスが答えた。

地上にある、霊界とのゲートが開いて、悪霊達が大挙して押し寄せてくるのだという。ゲートは無数にあって、ひらくタイミングや時間などはそれぞれに違いがあるのだという。

それを塞いで行くのが、本来の、ルクスやわたしの役目なのだと、長屋先輩にもわたしにも説明してくれた。

いままでわたしに説明しなかったのは、わたしにその覚悟があるのか、そして実力があるのか、判断しかねていたらしい事も、ルクスは話してくれた。

「で、魚子には、資格があったと？」

長屋先輩は意地悪くルクスに聞いた。

「まあ、そんなとこかな」

ルクスはわたしにも聞こえるように言って、笑い転げた。

わたしはなんだか複雑な心境で、ルクスの言葉を受け入れた。

時間もだいぶ遅くなってしまった。

長屋先輩は既婚者だが、今晚はわたしの部屋に泊めて欲しいと言ってきた。

客用の布団は一組あったので、それを使ってもらう事にした。

どうしてわたしのところに泊まりたいのかは、あえて聞かなかった。

長屋先輩は自宅に連絡を取って、旦那さんの了解を得て、わたしの部屋に泊まった。

さすがに無断外泊は出来ないからね。

わたしは先輩と語りながら、かなり遅い時間になってから、眠りについた。

宇宙人の憂鬱 47.

ここは何処？

わたしはどこかわからないような、そんなところに居た。

見覚えがあるが、どこで見たのかは憶えていない。

ふわふわとした感覚があるから、現実の世界ではないのだろうと分かって、何だ夢か、とも思ったけれども、それにしてもリアルな夢だな。

もう一つ気がついた点は、人が居ない。

この夢の景色が不自然なのは、登場人物が居ないのだ。

街路樹が印象的な町並みだ。

木下にはベンチがあって、気がちょうどよい日陰を作り、歩き疲れた人たちが気軽に休めるようになっている。

その近くにある店や、自動販売機など、どこかで見た。

記憶を探っていくと、十数年前の実家付近の商店街の景色だって事に思い至った。

しかし、なぜに人が居ない？

田舎だからってもう少しは、と思っていると、店から誰か出てきた。

女の人のように思えた。

思えたというのは、光の加減で、容姿が確認できなかったから、ただ感覚だけで判断するしかなかった。

その人が、チラとこちらに視線を走らせて、それからすぐに別方向を見据えて歩き始めた。

わたしはついて来いと言われていたのだと感じて、ふわふわと、それに従った。

景色は流れていったが、ついに人は現れなかった。

誰一人としてすれ違うこともなく、この世界の登場人物は、前を歩く人物と、わたしだけしか居なかった。

ルクスは？

声が聞こえない？

それどころか近くに居る感覚もない。

本当に夢の中なのだな。

わたしは、夢の中ならば死んだりすることはないと高をくくって、楽しむことにした。

わたしの覚悟が決まったところで、前に行く人物が振り返った。

「覚悟が決まったかね？」

男とも女ともつかない声が、響いてきた。

相変わらず、相手の容姿は、はっきりと確認することが出来なかった。

「覚悟？この戦いの？」

わたしは悪霊たちとの戦いのことを言われたのだと思い、そう答えた。

「他に何かあると？」

どこから聞こえてくるのかさえ定かではない声。

催眠術？神の啓示？それとも悪魔？

「どっちだと思う」

意地の悪い問だ。

「わたしはそのどちらでもないよ」

声は透き通っていて、実に聞き心地が良い。

「君たちの言葉で言うところの、神霊とでも言うのかな」

ゆっくりとこちらに近づいてくる感覚。

だけど、わたしに恐怖はなかった。

存在は、威圧することもしていないので、本当に空気のように感じられた。

「あなたには、アイツラと戦ってもらいたい。もう戦って居るだろうが、これからはもっと酷くなる」

「だから、あなたに力を渡す」

「ルクスから得ることの出来ない力だよ」

人物、存在は、そういつて、わたしの上に手をかざした。

「ルクスのことを知っているのですか」

わたしは相手からパワーが送られてくるのを、体感しながら、自分でも馬鹿な質問をしたと思った。

「ルクスは、あの子は少々特別なのだ」

「あの子にも役目はあるが、それは本人にも、そしてこのわたしにも、まだ分かってはいないのだ」

人物、存在は、わたしに力を与え終えたのだろう、そっと頭上から手をどけた。

「これでよし。目が覚めたら、力が上がっている」

存在はその言葉を残して、わたしの前から消えてしまった。

そして、わたしの視界も、夢の中で暗くなった。

目が覚める感覚があり、天井を見上げると、豆電球のようなものが点いていたので、薄明かりで壁の時計を見ることが出来た。

母が誕生日にくれた、ドナルドダックの時計。

デイジーちゃんも居るお気に入り。

子供っぽい！！！！恥ずかしい！！！！

赤面しつつも文字盤が見えた。

朝の3時30分程度か。

そして、存在の言うとおりに、体が世紀に満ちているのが実感できた。

わたしはこのまま2度寝してもつまらないので、ゴソゴソと起き出して、インスタントコーヒーでも飲むことにした。

宇宙人の憂鬱 48.

おかしい夢だったが、わたしには実感があった。

気が満ちている感覚。

これは、昔、虐められている時に夢中になった拳法や気功法などの経験から、感じる事が出来た。

不思議な事に、と言うか、今ならば当然だろうと納得できるが、昔から、靈感めいたものや、気功などが得意分野だった。

家族の血？ 遺伝？

本当にそうなのだろうか。

夢はそれを教えてはくれなかった。

ただ目的はわかった。

あいつらとはなんなのだろうか。

今までの経験から、悪霊のようなもの、としかわかっていない。

ルクスはその正体を知っているようなのだが、一向に教えてくれない。

母も詳しい事は教えてくれない。

それどころか、今まで、隠されていた。

悪霊と対決する覚悟か。

当然やられる事だってあるのだろう。

康子の時もそうだったが、わたしには守りたいものが少ないようだから、こういった使命に向いているのか、地震は無かった。

それどころか、なんでわたしが？と言う疑問ばかりが先に立って、頭の中を駆け巡った。

なんでわたしが、この世界を守らなければならないの？

誰よりも破滅を望んでいたこのわたしが。

まあ、今は、虐められていた時期とは違って、守りたい人は出来たし、両親や仲のいい人達は、昔から居た。

だから、本当に心から世界の破滅を望んでいたかということ、一概には言えなかった。

そんな事よりも、与えられた情報が、ぜんぜん足りていない。

その事を実感した。

「そろそろ朝ご飯の用意をしないと」

壁の時計を見ると、いつの間にか5時を過ぎていた。

朝食の準備を始めると、匡子さんが起きてきた。

匡子さんは、ニオイに釣られて起きてきたらしい。

わたしの手際をしばらく見ていて、彼女は一言言った。

「嫁にしたくないわ～」

ちょちょっと～。

「それって」

匡子さんは笑って、手伝ってくれた。

見るに見かねたという感じだろうか。

ルクスも側に居て、クスクスと笑った。

本当によく笑う子だ。

一珠世も料理が下手だったわねー

そうだった。

わたしはクスリと笑った。

母は料理が苦手で、よく買って来た惣菜や、インスタントの簡単な食事が多かった。冷凍食品が最高に美味いとか、そんな事を言っていたな。

わたしも母譲りか。

「ね、アレってやっぱりゾンビだったのよね」

平静を装ってはいたが、動揺しているのは見え見え。

「たぶん」

わたしも匡子さんの事は言えないな。

「映画みたいで凄かったね」

声が少し、ふるえていた。

時間が経って、冷静に判断して、それでも恐怖心がおさえ切れていないのだ。

この人は、もう自分から離れていくんだろうなと、何となくそんな事を思った。

どうしてそう感じるのか、わたしにもわからなかった。

宇宙人の憂鬱 49.

長屋匡子さんは、朝食を終えると、先に行くねと言って、出て行ってしまった。

まだ早い時間だから、本当に勤が当たってしまったのだろう。

しばらくすると、長屋さんからメールが入ってきた。

”しばらく会社を休むので、心配しないで”

と言うものだった。

わたしは溜息をついた。

そして、返信をしておいた。

”わたしも、落ち着くまで会社を休みます。さすがに疲れました。”

と、送っておいた。

壁の、ドナルドの時計を見る。

6時になっていた。

相談したくても、この時間である。

母が起きているとは限らない。

でも、わたしは遠慮なく、電話してみた。

もし怒られても、そこは親子であるから、その辺は向こうに泣いてもらおう。

スマホの電話マークをタップして、スピーカーモードにした。

コールが13回鳴ったところで、眠そうな母の声が聞こえてきた。

サボリ主婦め！

まあ、お父さんが仕事に行けないのだから、って、母も仕事があるんじゃない？

ひょっとして、父さん母さんラブラブ？

などとどうでも良い事を考えながら、母におはようという。

「切るわよ」

どは、怒りといらだちの母の言葉であるが、わたしはあえて謝罪の言葉を飲み込んだ。
事態をあらかじめ教えてくれなかったのだから、これくらい我慢させてやる。

「お母さんはゾンビと戦った事は有るの？」

単刀直入に、なんの前置きもなく聞いてみた。

「ゾンビ？」

「動く死体？」

「そいつらは、死体に悪霊が乗り移っているのよ」

「あなた、戦ったの？」

「塩なんて有ったの？」

母は一气喋って、わたしをイラつかせた。

「やっぱり知っていたんだね」

「知っていたって言っても、出てくる相手なんて、予想も出来ないわよ」

「それでも、娘に危機を知らせてくれないの？」

母は少し間を置いて、答えた。

「その事なんだけれど、メモがあるから、昨日送っておいたから、今日辺り届くんじやないのかな」

この辺は、やっぱり親子か。

だけれども、前言は撤回しない。

なぜならば、秘密が多すぎるからだ。

語られない部分が多すぎるのだ。

「ゾンビの他には、何か来るの？」

「基本、何でも来るよ」

と、母が言った。

「悪魔、吸血鬼、小鬼、その他使い魔、ホラーモンスターのオンパレードよ」

あまりの事に、わたしは驚愕を通り越し、口元が、喜びにふるえた。

本当は恐いはずなのに、なんだか楽しくなってしまった。

「魚子、喜んでいない？」

母が言う。

見透かされた？

「一族の生い立ちを話しておこうかな」

「わたし達の一族は、呪われているのよ」

「何百年も前に、神を殺したらしいの。そのために、その殺した神の代わりに、ヤツらからこの世を守らなければならなくなってしまったの」

「そうする事によって、人間達に受け入れられるようになる」

「子供の時に、酷い虐めに遭うのは、そのためよ」

わたしは母の言葉を聞いて、納得するよりも、なんじゃそれは！という感情がこみ上

げてきた。

そんな理由で、虐められたのね。

なんだかあほくさい。

「電話、切るわよ、詳しい事は、手紙にも書いておいたから」

母は電話を切った。

わたしはルクスにも説明を聞きたかったが、こんな時に限って、ルクスは現れなかった。

宇宙人の憂鬱 50話わが家の真実

わたしは、会社には出社しないことを決めて、頭の中を整理しようと、散歩に出かけた。

今日は曇り空で、涼しいくらいの初夏の気候だった。

この辺りは首都圏とはいっても、田舎の田園に近い風景を残していた。

わたしはわざとそういったところを選んで、生活の場に使っていた。

人が嫌いなのと、あとは経済性であった。

都会に行けば、色々とやすく購入できるが、家賃などが、許容範囲を超えて、わたしの給料では、生活が困難になる。

同年代は大概、都会に济みたがるが、わたしには、ここが丁度良いのだ。

今日は散歩日和だ。

わたしはよく、朝の散歩をする。

運動のためばかりではない。

気分転換には、散歩が適している。

どういうわけか、ルクスは今朝から出て来ないし、不安な気持ちを抑えるのにも、気分転換は必要だった。

わたしはゆっくりと、朝日を浴びながら、2キロくらいの道程を歩いた。

そして、心身ともにリフレッシュして、部屋に帰ってきた。

まだ7時を過ぎたばかりだった。

身体が温まったので、冷蔵庫に常備の、麦茶を取り出して、コップに注ぐ。

麦茶の心地よい冷気が、喉を潤す。

「ルクス？居ないの？」

わたしは頭の中で呼びかけてみた。

返事はなかった。

一体どこへ行ったのだろうか？

ルクスは何をしているのだろうか？

謎の多い子だな。

まあ、幽霊であるから、普通の人間の考え方は通用しないのだ。

ポケットからスマホを取り出して、テーブルの上に置く。

小さな LED が点滅している。

着信でもあったか？

見てみる。

母からの着信が入っていた。

わたしは早速かけ直してみた。

7コール後くらいに、母が元気そうな声を効かせてくれた。

「いつでも良いから、お父さんのお見舞いに来てよ」

母はそう言って笑った。

なんでも、さっきわたしが電話をかけたら、父がなぜ自分に知らせないで電話を切ったのかと寂しがっていたというのである。

「今日行ってやろうか？」

わたしが言うと、会社はどうしたの？と、母が聞いてきたので、経緯を話した。

「わかった、今日待っているね」

「でも、荷物、どうしょっか」

「あなたが会社に行くものだと思って、時間指定しておいたのよ」

「何時なの」

「一番遅い時間よ」

「これからそっちに行けば、時間はあるね」

わたしは通話を切って、支度をはじめた。

実家に帰るのに、楽しい気分にはなれなかった。

この前帰ったばかりだし、今回は目的も違っていた。

父の見舞いは、もちろん口実。

真相を、事実を確認しないといけないのだ。

どういった経緯があって、今回のような冒険を強いられるようになったのか。

神を殺したというのはどういったことなのか。

わたしには、神や悪霊と対決する力はあるのだろうか。

本当に謎が多すぎる。

不明な点が多すぎる。

わたしは、支度を終えると、玄関のドアの鍵を閉めて、駅へと向かった。

宇宙人の憂鬱 51.

わたしは、実家付近の駅に降り立っていた。

母は車で迎えに来る事はなく、1キロの道程を歩いて実家まで行かねばならなかった。

日差しがきついで、途中の自販機で水分補給をして、木陰で汗を拭わなければならないほど、気温が上がっていた。

木陰で休憩していると、雀の鳴く声や、虫の声や、その他機械音などの雑音が世界を包み込む。

ベンチがなかったので、長時間休む事も出来なかった。

急いで缶ジュースを飲み干すと、空き缶をゴミ箱へ放り込んで、歩みを再開した。

1キロ程度なので、ゆっくりと歩いても15分もかからないで実家に着くのだが、ご近所さんのお店に顔を出したりして、ちょっとしたモノをお土産に選んでいるうちに、30分ほど経ってしまった。

ルクスはついてきているのかなと気になって、頭の中で呼びかけてみる。

—いるよ～—

ルクスは明るく返事をする。

コイツは本当に明るい幽霊じゃのう。

わたしはルクスの明るさが、どこから来るのか不思議でならなかった。

ルクスは悲惨な殺され方をした女の子である。

でも、本当に明るい幽霊さんだった。

わたしがはじめてルクスを見た時に、全然恐く思わなかったのは、ひとえにルクスの人柄だったのかもしれない。

家に着いたので、一応他人行儀にドアベルを鳴らしてみる。

なんだか実家とは言え、他人の家のように思えてしまうのは、本当にもう長い間離れて暮らしているからだろう。

もうアパートの部屋が自分の住処になってしまったのだ。

一人のあの部屋が、自分の生活になってしまったのだ。

寂しいのかな？

よくわからない。

母が家の奥から出てきた。

娘の来訪に、つまらなそうな顔で対応する母に、先ほど買ったお土産をわたす。

つい最近来たばかりなのに、お土産なんて持って来るから、母も訳わからんって顔で、レジ袋を受け取る。

「中身は何かな～？」

一応鼻歌を歌って見せて、奥へ入って行く。

わたしも後へついて行って、居間に座った。

テレビを見ながら母を待っていると、なんだか古くさいメモ帳持ってきた。

「あなたの家に送ったモノとは違う資料よ」

「神を殺したとかって話し？」

わたしが言うと、母は頷いた。

「わたし達は呪われた一族ってところね」

呪われた一族という割りには、母の物言いは大変明るい。

ルクスと同じくらいに、嫌みなくらい明るい口調で話している。

「神を殺したとか、ラノベやマンガのストーリーにありそうだけど？」

わたしもまげずに軽口を叩いておいた。

母は笑って、そうねといった後に、メモ帳を読むように促した。

わたしはメモ帳を手にとると、ページをめくり、文字を追った。

宇宙人の憂鬱 52.

わたしはページをめくった。

そこには、なんだか古めかしい文章で、口語訳された昔話が書かれていた。

村が飢饉に見舞われていた。

たくさんの村人が、飢えに苦しんでいた。

まるで地獄絵図であったという。

食い扶持を確保するために、子供を殺す親もあったようで、村中に死の匂いが立ちこめていた。

そんな中、小さな女の子をお伴に連れ、精悍な姿の山伏が村を訪れたという。

山伏は村の様子を見て、この村は、守り神が悪くなってしまっ、それでこの災厄が起こったというのである。

そこで山伏が村の守り神である神社の前に、自らが選抜する男女を連れて行くと言い始めて、すぐに男女²人を選び出した。

そして村で一番霊力が強いと思われる刃物、農機具などを武器としてその²人に持たせて、術をかけて、神社の中に入っていった。

神社の中に入ると、山伏と男女の姿は消えて、神社が光り輝き、しばらくして³人が帰って来た。

³人は血だらけの姿だったという。

そして、中の様子がどうだったかと村人が尋ねると、山伏が、神は倒した、安心してくれ、と言って息絶えたという。

男女²人は、山伏と一緒にいた女の子を引き取り、それが下山家の始まりだという事が書かれていた。

わたしはそのメモを読み終えると、それがどうして神を殺した事になるのか今一つよく理解できなかったので、母に聞いてみた。

「²人が神にとどめを刺したらしいのよ。持って行って農機具や刃物を武器にしてね。それ以来、神の力の一部が、わたし達の一族に伝承されるようになったらしいの」

「女の子が、ルクスなのかな？」

「おそらくね、でも、彼女は憶えていないし、語らないのよ」

「そうなんだ。なんだか信じがたい話しかれど、今までの出来事を考えると、そういった伝承も、なんだか信憑性があるものね」

わたしが言うと、母は溜息交じりに軽く笑った。

わたしは母の哀しそうな笑顔の意味を、理解する事が出来なかった。

これからわたしもその意味を理解する事になるのだろうか。

なんだかあっさりした話しなので、逆説的にはあるが、裏に何かが隠されているのではないかと、かえって勘ぐらずにはいられなかった。

本当に、何があるのか、調べてみたい気もするが、もっと恐い真実が有るような気がして、調べて良いものかどうか躊躇する気持ちもあった。

わたしはますます深くなって行く、自分のルーツの謎に、何かおそろしいものを感じないではいられなかった。

「ご飯食べてくよね？」

母が明るく問う。

「そうする」

わたしも頭の中の思考を追い払うと、明るく答えて見せた。

宇宙人の憂鬱 53.決意

よく理解できない！

わたしがメモを見た感想である。

何が理解できないのかすら理解できないでいた。

わたしの頭はファンタジーやホラーっぽいものは理解しがたい頭らしい。

神だとか悪魔だとか、悪霊だとか幽霊だとか、なんで自然に受け入れられたのかすら不思議でならない。

ルクスちゃんの魔力かな？

違う気がする。

どうしてルクスの話がすんなりと受け入れられて、今の今まで何回も化け物や幽霊と戦ってこれたのか？

わたし自身にも謎があるのかな？

秘められた・・・能力？

そんなカッコイイものではないだろう。

どうしてそういったことが出来たのか？

思い当たる節は、性格だからとしか言えない。

昔から、何かわからないことがあっても、冷静でいられる自分がいた。

酷いいじめにあっていたせいで、どこか世界を達観している気がするのだ。

視点の高い位置から、自身を俯瞰する感覚だ。

冷静になって世界を見ることが出来る。よく言えばそうだが、どこか夢中になったり熱を上げる対象のない観察者として、自分の周りの世界と接している気がするのだ。

それがわたしの性格であり、性質なのだろう。

そしてこの、自問自答して納得する性格も、いじめられて一人で過ごしてきたことによるものなのだろうな。

そのように納得してしまえる自分に、わたしはなんだか悲しくなってしまった。
そしてあることに気がついた。
地獄の使者がわたしの前に現れる理由と、それをわたしだけが退治しなければならない理由。
退治できる力ならば、母やルクスの方があるのに、なぜわたしなのだろうと思っていたが、これが今思いついた理由が正しいとしたならば、わたしがやらないといけないことなのだ、なんとなく納得できる。
わたしが神の力を受け継いだのであればなおさら納得がいく答えなのではないかと思う。

この試練は、総これら試練なのだ！
この試練はわたしが人間になるためのものなのだ！
そう考えると、わたしの中ではなんとなくではあるが、納得できるものがあった。
化け物を退治して、地獄、あるいは神の世界と対峙して、けりをつけなければ人間として生きてゆくことが許されないのだろう。
何か無理に納得する理由をつけている気もするが、そう思うと、これからの方針が見えてきた。
やはり当初の予定通りに、というかルクスの言ったとおりにわたしが奴らと対決していかなければならないのだ。
決断の時！ こういったときのわたしは、意外と行動が早いのだ！
方針は決まった！
今何が必要か？
それを考え始めたときに、ルクスの声が聞こえてきた。

宇宙人の憂鬱 54. 決意2

一心の方向が定まったようね？
ルクスは一っこと笑って見せた。
この子の正体は何なのだろう？
わたしのご先祖様なのだろうか？ メモの文章や話の流れから察すると、その可能性が高い。
ルクスに聞いてみようかな？
そう思ったときに、ルクスの方から答えが聞こえてきた。
一わからないのよー
わたしの心を読んだのだろう。
ルクスはわたしの目の前をふらふらと行ったり来たりしながら、悲しげに笑って見せた。
ルクスの後ろにある小型の水槽になにも入っていないのを見つけると、そちらに気が取られてしまい、なんだかどうでもよくなってしまった。

ルクスが笑ったように見えた。

ひょっとしたら、彼女がそのように誘導したのかもしれない。

わたしはそう思って、何か隠し事をしているのだなと直感した。

「ルクス、なにかかくしてる？」

ルクスは笑ったが、はぐらかさなかった。

—わかっちゃったか？—

「わかっちゃったか～じゃないよ！意地が悪い！」

わたしが膨れつらで応じると、ルクスはケラケラと笑った。

わたしはますます膨れつらになり、ルクスは大きく仰け反って笑い転げた。

こいつ本当に幽霊かよ！というほど元気よく笑い転げるルクスを見ていると、不安と何かが入り交じって、複雑な気持ちになった。

—わたしが魚子の先祖かどうかは本当にわからないのよ—

—ただわたしはあの時代にあの場所に居たらしい事は、何となくだけれども分かっていたの—

—わたしはあなたの先祖の方達と一緒に居たの—

ルクスはウロウロと動き回るのをやめて、わたしの目の前にしゃがんで見せてから、話しを続けた。

—わたしはどうやら、あなたの先祖に拾われた、あなたの先祖がわたしの里親だったのであるかと思っているの—

—わたしには巫女の素質があるって、村の近くにいた霊媒が言っていたわ！—

—だから幼いわたしが、一緒に連れて行かれたのよ。よく覚えていないのだけれども、そんなところかな！—

随分明るいな！この幽霊は！笑出したくなるほどに元気がいい！！

本当に死んでいるの？と疑問を投げかけながらも、本当の親は誰かわからないの？と聞いた。

—うん！分からなかった—

「かった？」

—死んだ瞬間に全てがわかったの—

「誰だったの？」

—それはまだ秘密—

にっこりと笑って、ルクスは私をじっと見つめた。

「何？」

わたしはルクスの方を見つめながら、微笑み返した。

—ううん、なんでもない—

ルクスは笑いながらわたしのところへ来た。

身体がないので触れないのがもどかしい！

頭を撫でてやりたい気持ちを抑えながら、新たなルクスへの疑惑と、自分が何をやるべきかを考えたが、思考がまとまらないのでイラついて頭を掻いた。

<あとがき>

お読み頂き有り難うございます。

この作品は投稿サイトで公開したものをまとめて電子書籍にしたものです。

23歳OLの魚子の冒険はまだ続きます。

良かったらまた読んでください。

酎ハイ呑兵衛